8B-4 no. 45

GAa1／1
8B－4－45

勤労青少年と友情

（昭和51年度「勤労青少年福祉シンポジウム」記録）

女性と仕事の未来館
館内
0096462 4

労働省婦人少年局 52/1

年少労働課
資料 No. 108

はしがき

勤労青少年福祉シンポジウムも回を重ねて、五十一年度は第五回目にあたります。

勤労青少年育成指導者及び関係者が、当面する問題をもって、一堂に会し、研究討議し、更にこの機会を通して、親睦と、連携を深めるこの行事は、年と共に関係の方々の関心を高め、参加者の増加をみております。

本年度は勤労青少年が、心身のバランスある発達をとげるために、豊かな人間性を育てる観点から、「勤労青少年と友情」というテーマが、とりあげられました。

関係者の方々の明日への、よりどころともなるよう、当日の概要と特別記念講演ならびに研究討議の速記録を印刷発行し、参考に供することといたしました。

昭和五十二年一月

労働省婦人少年局

目次

昭和五十一年度勤労青少年福祉シンポジウム概要……1
労働大臣あいさつ……2
特別講演「さまざまな立場」……3
研究討議「勤労青少年と友情」……13
（各講師の意見発表）
一　勤労青少年の特質と環境……14
二　勤労青少年と職場の人間関係……18
三　勤労青少年の友人関係の悩み……21
四　地域社会における勤労青少年の友人関係を通しての育成……25
（全体討議）

昭和五十一年度勤労青少年福祉シンポジウム概要

一　趣　旨

全国の各分野で活動している勤労青少年育成指導者及び関係者が勤労青少年の健全育成や福祉の向上に関し、当面する諸問題について総合的に研究討議を行うとともに広く意見を交換して、相互の理解と連係を深めるため、勤労青少年福祉シンポジウムを開催する。

二　開催日時及び場所

日時　昭和五十一年十月二十五日（月）
　　午前十時三十分～午後四時

場所　東京都千代田区九段南
　　九段会館

三　内　容

第一部

開会のことば
　労働省婦人少年局長　森山真弓

あいさつ
　労働大臣　浦野幸男

勤労青少年福祉関係者表彰

記念講演「さまざまな立場」
　作家　三浦朱門

第二部

研究討議「勤労青少年と友情」

司会
　東京大学教授　江橋慎四郎

講師
　雇用促進事業団職業研究所研究員　岡本英雄
　富士写真フィルム㈱足柄研究所事務部主任　矢野雅義
　日本産業カウンセリングセンター理事長　野原蓉子
　横浜市勤労青少年ホーム館長　熊倉博安

閉会のことば
　労働省婦人少年局年少労働課長　本多去来弥

四　参加者の範囲

(一) 勤労青少年ホーム館長その他の職員
(二) 勤労青少年ホーム以外の勤労青少年福祉施設の職員
(三) 都道府県・市町村労働福祉主管課の職員
(四) 勤労青少年福祉推進者
(五) 年少労働者福祉員
(六) 勤労青少年福祉団体関係者
(七) その他の勤労青少年育成関係者

労働大臣挨拶

昭和五十一年度勤労青少年福祉シンポジウムを開催するに当たり、勤労青少年育成のために活躍されている皆様の平素の御努力に対し、敬意と感謝をもって一言御挨拶を申し上げます。

現在、働く青少年は、全国でほぼ八〇〇万人にのぼり、わが国産業の基礎を支える力となっておりますが、これら勤労青少年は、心身の発達過程にありますので、その健全育成については十分な配慮が必要であります。

今日の勤労青少年の中には、親元を離れ、不安な都市生活を送っている青少年が数多くおります。

また、余暇時間は、著しく増大しておりますが、必ずしも積極的に活用されているとは言えません。

更に、高学歴化が進んでおりますが、その学歴と実力が職場で十分生かされないという不満が見られるなど、幾多の問題を抱えております。

このような状況の中では、従来にも増して、よりきめの細かい指導と援助が急がれるところであります。

勤労青少年が、人間性豊かに、心身のバランスのとれた発達をとげるには、日常のスポーツ活動の振興と良き仲間作りを進める場を作ることが重要であると考えます。

現在、勤労青少年福祉の拠点として、重点的に設置が進められている勤労青少年ホームは、昭和五十一年度末で全国で三四八カ所に達し、スポーツ活動や、仲間作りのために、重要な役割を果たしております。

労働省では、今後も引続きその設置を進めるとともに、機能の充実を図る所存であります。

本日ここに、全国から関係者の皆様の御参加をいただき、「勤労青少年と友情」をテーマとして、研究討議が行われますことは、誠に意義深く、今後の勤労青少年育成に役立つものとなることを期待してやみません。

昭和五十一年十月二十五日

労働大臣　浦野幸男

〈記念講演〉

さまざまな立場

作家　三浦朱門

進行係　ではただいまから記念講演に移ります。

講師には、作家の三浦朱門先生をお迎えいたしまして、「さまざまな立場」という演題でお話をいただきます。

三浦先生につきましては皆様ご承知のとおりですが、簡単にご紹介いたしますと、先生は東京都のご出身で、東京大学文学部を卒業され、ただちに日本大学芸術学部で教鞭をとられ、長らく教壇と文筆活動を兼ねて行なわれておりましたが、七年前から文筆活動に専念されておられます。先生の作品には「箱庭」「羊が怒るとき」のほか数多くの短編集がございます。

では先生、よろしくお願いいたします。

さまざまな立場

作家　三浦朱門

三浦でございます。私は、いまご紹介にあずかりましたように教師をして若い人と接していた時代もありますが、この数年は文章を書いて暮らしております。皆さんのような青年問題のご専門の方々の前で何を申し上げてよろしいか、ちょっと困るのです、あえて釈迦に説法ということもございますので、とにかく私の立場、私の考え方、そういうものを申し上げて、それがもしなんらかのご参考になればと思う次第です。

十月の初旬に文芸春秋の講演会がございまして、その時渡辺淳一さんというお医者さんで小説を書く人と一緒になりました。渡辺さんが、医学というのは学問じゃないんじゃないかということを言われました。大変面白いと思いまして、私ども文学部におりますと、文学部でやっているなんていうのは学問じゃない、まあ体のいいでたらめだというふうに思っておりました。その点医学というのは、とにかく人間という、人間の生理現象という客観的な対象があって、それが何かの具合で病気になる、それを直すというふうなものは、ちゃんと目の前に立証できるものである。だから医学が学問じゃなかったら学問というのはほかに何があるだろうぐらいに思っていたもので、大変に驚きまして、なぜ医学が学問でないのかと尋ねますと、渡辺さんが、人間のからだというものは一人一人全く別だというんですね。

同じ病気していても、同じ手術をしていても直り方は違ったり、薬がある人にはやたらに効いたり、ある人には全く効かなかったり、こんなに個体差があったのでは一般的な原則は成り立たない。確かに解剖してみると、ここに胃袋がある、ここになんとかという骨がある、それは共通である、その点では同じでも、生きている人間の生き方と言いましょうか、生理的な反応とか現象とかいうのは実に千差万別である。してみると、これはもう一つ一つに対応している限りにおいては一般的原則などというものはとても出て来ない。それで、医学というものは果たして学問なんだろうか。

もちろん学問として扱うためには、人間を数でこなしまして、一億人というふうな単位で考えますと、一億人の人間、日本人が一年間に消費する食糧のカロリー数とか蛋白質の量とかそういうふうなものは、だいたい予想できるし、計算どおりいくのだろうと思う。あるいは一万人の人間がいる時に、その人間の集団が出す排泄物の量などというものは、これはもうほとんど間違いなく計算できる。これは物理や化学の実験でいろんなことをやりましても、ある程度実験の結果

にばらつきがあります。それと同じ程度のばらつきしかないだろう。だから人間をマスで測った場合には確かに医学というものも、学問になる要素もあるのかもしれないけれども、治療する医者の立場としてみるとこれはもう学問なんていうもんじゃないんだ、というのが渡辺さんの趣旨だったように思います。

私はそれを聞いて、一番先に思い浮かべましたのは、国語なんです。私はこういう職業、たとえば大学は文学部の言語学科であるとか、そして長い間教師として外国語や文章の書き方、そしてあるいは小説の読み方とか教えておりました。あるいは自分で文章も書いてきた。そういうことを申しますと、たいていの方は、私は国語が子どもの時から出来たのだろうとお考えになる、しかし私は国語というのは最も苦手な科目の一つでした。もっとも文学部というのは大変困ったところでして、私の仲間などでも戦争中に勤労動員などに農村に行きますと、文学部の学生なら字がうまいだろう、表札を書いてくれと言われて大変に往生した男がおりました。

私も文学部におりましたが、大変に字が下手でして、のみならず国語も嫌いで、そういうことを思うと、なんのためになぜ文学部にいったかわかりません。しかし、むしろ国語は嫌いだから文学部にいったのであって、恐らく国語の好きな人あるいはことに現代国語の得意な人というのは、文学部にいかないんじゃないかと思います。

私と仲のいい友だちで遠藤周作という男がおりますけれども、この男の文章が今年でしたか、東大あたりの国語の入学試験問題になりました。その問題を遠藤が見て、要するにある文章を読んで、これについて作者が言わんとしていることは何であるか、Aしかじか、Bうんぬん、Cなんとかかんとかあるわけです。遠藤はじっとそれを見ると、全部おれが言いたいことだというんですね。そん中の一つを選んで答えろというのはちょっとこれおかしいんじゃないかと思う。これは書いた人間自身が言うから間違いないことだと思います。つまり、現代国語というのは、要するに文章を読んで、そして理解の度合を示すわけですけれども、その中で作者がこの文章で言わんとしていることは何かとか、これはどういうことであるかとか、あるいはこれに題をつけるとしたら何がいいかということは、実はそう簡単に決めてもらっては困る。書いているほうから言いますと、これはいろいろと問題のあるところなんです。

たとえば、芥川龍之介という小説家の、なんといいますか童話風の短編で、「トロッコ」というのがあります。芥川はいくつか少年を主人公にしたものを書いておりまして、そのうちの一つです。主人公の少年の家のそばでどこかに、工事場に土を運ぶのでトロッコの線路が敷かれて、そこに労働者が働いていて土を運んでいる。もちろんその重い坂をうんうん押し上げるのは大変なんですが、下り坂になるとそのトロッコに乗って勢いつけて下っていく。そういうのを見て非常に楽しそうに思う。そしてあこがれるわけです。そしてその少年はだんだんそのトロッコの労務者たちと親しくなりまして、ある時とうとうそのトロッコを押してついていく。一緒に骨折って押したり、あるいは一緒にトロッコに乗って下り坂を気持ちよく走り降りたりしている。そのうちに日が暮れてくる。少年はいつか行き止まりがあるだろうと思って、あるいはまた帰ってくるだろうと思っている。日が暮れてくるが一向に帰りそうにない。

そうするとトロッコの労務者たちが、「お前、いいかげんに家に帰ったらいいじゃないか」と言う。彼はその時その瞬間まで、自分はそのトロッコを押している労務者たちの仲間になったつもりでいた。その時に急に、お前は仲間はずれだ、おれたちの仲間じゃないんだ、早く帰ったほうがよかろうと言われて、何か愛想づかしをされたような気がして、非常に

ショックを受けて、泣きながらだったかどうか覚えておりませんけれども、その線路伝いに自分の家に走って帰っていくという物語です。

確かに、大人と子どもの世界の差とか、あるいは子どもの憧れとか、あるいは一種の挫折感とか、そういうものがうまく書かれておりまして、中学校の教材なんかには適したものだと思います。しかし、私の考えでは、これはあくまで私の考えですけれども、この「トロッコ」というのは、単にある少年のあこがれ、あるいは大人と接触した少年の心の記録を書いたというふうなものではなくて、恐らく芥川とプロレタリア運動の関係を書いたものだと思います。その頃から既に、無政府主義も共産主義も日本人、ことにインテリの間に紹介されている。そしてそれについての運動が起こりつつある。芥川は非常に賢い人ですから、そういう運動についてだれよりも先にその思想を理解したうちの一人だろうと思います。

芥川は彼らと話をしている時に、非常に共感を覚える。しかし、あんたはわれわれの仲間じゃない、実際に運動する人間じゃないと言われて突き放される。そういう思いを味わったに違いない。それが彼にトロッコという小説を書かせたに違いないと思います。

トロッコが書かれた時期の彼のほかの作品、あるいは彼の日常生活においてどういう人たちと接触したかということを調べますと、どうもこの前後に彼の一種の挫折感がある。

そしてもう少し後になりますと、芥川は、先輩の文学者たちと、新しいイデオロギーを持った新人たちの間に板ばさみになって、おれはつんのめりそうだというふうなことを短い文章で書いていたりしております。つまり、プロレタリア文学というものが正に興ろうとする時に、彼は素早くそのようなものの動きをつかむ。その必然性も理解できる。しかし自分はそれから仲間はずれになる。あるいは理解を示すだけではだめだと言われてしまう。そういう不安を彼が持っていたということは、それから後の様々な文章についても明らかです。

また今の共産党の宮本顕治氏が、最初は政治家としてでなくて文芸評論家として世に出たわけですが、その時のテーマが芥川の文学であり、芥川の文学というものはやがて来たるべき時代の前には消えてしまう、敗北の文学である、敗れ去るべき文学であるという評価を与えていたということは大変に興味深いと思うのです。芥川自身はもうやはりプロレタリア文学をやる人たちの前に立ちますと、自分は敗北者であり、自分はトロッコの少年のように、お前はいつまでおれたちと一緒にいるんだ、いいかげんにお前の所に帰れ、と絶縁されるべき人間だということを意識していた。それをああいうふうなものに書いたに違いないと思います。

私はこの考えが正しいとか正しくないとか言っているのではありません。ただ中学校の、教材として、あれを教える場合に、トロッコでは、芥川がどういうことを言おうとしているのでしょうか。それはかくかくしかじかですと子どもたちが覚えてしまう。そしてそれについて何か考える時、あるいは書く時、そのように学校で習ったとおりに判断してしまう。そういうことが大変困ったことだと思うんです。だいたい文学というものは、作者がそういう意図を持って書いたか書かないかということは、あまり大きなものではない。非常にくだらない作品からたくさんの栄養を吸収する人もいる。非常に大きな作品からくだらない内容しか汲みとり得ない人もいる。それは一人一人の読み手の資質によるものです。従って同じ「トロッコ」という小説を読んだところで、これは五十人が読めば五十とおりの読み方があって然るべきです。それが文学というもので、だからこれを読んでどういうことを思いましたか、あるいはそれで作者は

何を言おうとしているのですかと、みんなで話し合ってまとめて、それでクラス全体の意見という形にされては、これは文学としては大変に困る。絶対そういうことはしてほしくない。

つまり、もし数学ならば、答が一になる、それ以外にあり得ない。物理でも、計算問題ですと答はそれ以外にあり得ない。前提となっている物理学の法則、あるいは数学の定理を使う限りにおいては特定の答え以外に出しようがない。それ以外のものは全部間違いです。

ところが、文学というのは、みんながそうだという意見を出すのが一番正しいのではなくて、あるいはそれのみが正しいのでもない。もしそうだとしたらば、世の中で評論家はめしの食い上げになる。評論家というのは一般の読者とは違う読み方を出来る。もっと深いか、あるいはねじ曲げたか、それは考え方の差ですけども、とにかくほかの人とは違う読み方が出来る。それでこそ評論家というものが成り立っている。国語は、数学や物理と違います。ですから、このものはこのように読むのは正しい。あるいは、こういう文章は、こういうことを言おうとしているのであるということを先生の指導のもとに生徒に教え込むことは不都合である。教え込むということは、一人一人のやわらかい個性的な子どもたちの心を、一つの鋳型に当てはめてしまうことになりはしないか。私はそういう意味で、自分が少年時代に国語が出来なかったこと、ことに今日現代国語といわれるものが不得意だったことを少しも恥ずかしいと思っていません。私はその当時も今も現代国語なんていうのはばくちみたいなものだと思っています。つまりその先生のものの考え方と、あるいは出題者のものの考え方と自分とが合っていればこれはすばらしくいい点が取れる。一方、合っていなかったらば、これは全くどうにもならないものなんです。

カフカという人は、偉大な文学者だろうと思います。みんながそう言うからその通りだろうと思います。しかし、私はカフカの小説というものはひとつも面白いと思わない。従ってカフカの小説について何か書こうとすると、私は大変否定的な文章を書くことになるだろうと思います。一方肯定的な意見を持つ評論家や文士もおります。私たちがお互いに文士であり、評論家でありますから、私がカフカを否定し、A氏がカフカを肯定しようが少しもかまわない。しかし私が教師であってA氏が生徒であったなら、逆にA氏が教師であって私が生徒であったならば、私の出した問題に対してA氏は恐らく零点をとるでしょうし、A氏が出した問題に対して私は恐らく零点をとるだろうと思います。

ことは国語だけのようですけれども、国語だけではなくて、私たち一人一人の人間がおかれている状況というのは、渡辺さんの話ではありませんけれども、大変違っている。一人一人が同じかぜを引いても症状が違う。薬の効き方が違う。それと同じように一人一人の人間のものの考え方、あるいはものの受け取り方というものが違う。従ってかぜを引いたらばこういう薬をこれだけ飲ませればいいんだといって、だれに対しても同じ処置をすることが間違いであると同じように、「トロッコ」という小説はこういうふうに意図を作者が持っていたんだと生徒に教えて、そのように信じ込ませることは間違いです。人間というのは量で測りますと確かに大体似たことをするものだと思います。ですけれども、一つ一つ見ますと、これは全くバラバラでして、そしてそのバラバラの人たちというものを、私たちはこれを例外なんだからと切り捨ててもよいでしょうか。

これ物理や化学の実験ですと非常に特異なケースが出てきますと、これは何かの都合でこんな結果が出たんだ、切り捨てちまえということがある。もっとも非常に偉大な物理学者というのは、何かの事情でこんな変な数値が出てきたんだといって切り捨てずに、何かの理由というのは何かと

いうことを恐らく突き詰めて、そして新しい問題、新しい分野を切り開くのだろうと思います。

相手が人間の場合には、一人一人バラバラである。主流から外れた人たち、最大多数、絶対多数のグループから外れてしまった人たち、これを切り捨てていいのかどうか。もちろん切り捨てていいと言う人はいません。しかし、切り捨ててはいけないという人の一部に対しては、私は大変疑問に思います。このグループというのは何かというと、その主流から外れた人たち、この場合めんどくさいから落ちこぼれと言っておきます。落ちこぼれた人間というのは、能力がないわけではないんだ。いろんな具合でそれが出来ないだけなんだから、先生と生徒が一生懸命協力することによって落ちこぼれずにちゃんとすることができるようになると主張します。

確かに、かけ算の九九を覚えるというふうなこと、あるいは漢字は書けるようになるというようなこと、あるいは連続して一〇〇〇メートル走れるようになるということ、これはある程度訓練で出来るようになります。小学校三年でも、走れと言ったら自然に一〇〇〇メートル走って、あとで一、二分も経てばケロッとしているのもいますし、五〇〇メートルで青くなってぶっ倒れる子もいますが、一生懸命先生がめんどう見て一緒に走ってやったり、心臓や肺臓の機能を増大するような手だてを講ずることによって、一〇〇〇メートル走るようにすることも出来ます。

しかし、これは芥川龍之介の「トロッコ」という作品は、作者がどういうことを書こうとしたのでしょうか。それは大人と子どもの世界の対立と子どもの挫折を書こうとしたのです、といった模範解答を一人一人の子どもに押しつけ、納得させ、そうだと信じ込ませることと同じではないでしょうか。

つまり、走れない子、あるいは数学が出来ない子というのは、それなりの意味がある。有名なことですが、エジソンは数学が、算術が出来なくて小学校を退学になった。そして彼は白痴だと先生に言われた。そしてエジソンの母親が、学校では白痴と言われていてもお前はそうじゃないと言って、エジソンを教えたといいます。それからまたニュートンという、アインシュタイン以前の物理学を代表する人が、数学が不得意で落第したことがある。またガロワという数学の天才、どうしても数学の入学試験にうからなかったなんていう人もおります。

このような人の場合、たとえば、エジソンが小学校で先生が非常に親切な先生にめぐり合いましてそして一生懸命数学を勉強して、いわゆる出来る生徒に追いついてしまったらどうなるでしょう。エジソンとしては、自分はあの子より数学が不得意で、そして努力すればなんとかついていける子なんだというふうに思う。別な言い方をすると、おれは数学が不得手で、努力で、ここまでやって来たんだと思う。そうすると数学が不得手だから多分理科系のものはやらないほうがいいだろうと、今日の日本の教育の制度では考えてしまうでしょう。

ところがエジソンは、学校の外にほうり出されてしまったために、学校の成績とか、あるいは自分が数学が出来るとか出来ないとかいうことを、それを問題外にして自分の好きなことにふけることが出来た。それがエジソンが自分の天才を伸ばせるようになった非常に大きな理由ではないかと思います。もちろんエジソンの母親の存在も大きいのですが、エジソンの母親そのものよりもエジソンが先生やクラスメートの中から脱落してしまったこと、それがエジソンの個性といいましょうか、おれはほかの奴らと違うんだ、独特のやり方をするより仕方がないんだという考え方を早くから持たせた理由ではないかと思います。ですから、落ちこぼれといいましょうか、ある集団のグループから外れてしまった、主流から外れてしまった傍系の人たち、恐らくこれは案外に数が多いと思うんですが、

彼らを無理にその主流の中に突っ込むということが、果たして意味があるか。

たとえば数学が出来なきゃ出来ないままでいい。国語が出来なければ出来ないままでいい。体力がなくて走れないならそれもそのままでいい。いわゆる一流校は、数学や英語のテストをしまして、それが出来る人を入れる。それはそれでいいのです。しかし、たとえ入学試験でどんなに英語がうまくても、あるいは国語の点が秀れていても、その人がことばの上の能力があるということにはならないのです。不思議なことに、小説書きの中で子どもの時から作文がうまかったという人は、比較的少ない。例外は小島信夫ぐらいのものでしょう。彼は、浪人三年か四年しまして一高にはいったのですが、浪人している間に作文だけはやたらうまいもので、予備校の作文の先生と一緒に参考書を作った。つまり、先生が題を出して小島がそれに対する文章を書いて、そして先生が、これはこういう所がいい、こういう所が悪いとかいうふうなことを書き加えて、受験用の作文というのはどういうふうに書くかという本を出したんだそうです。

しかし、それを除きますと、大抵の人は作文が下手である、不得意である。

私の女房の曾野綾子というのは、小説書いておりますけれども、これはもう子どもの時から作文が下手で下手で仕様がなかった。そしてその母親が心配いたしまして、こんな程度では将来年頃になってもラブレター一つ書けないだろうと思いまして、その頃なんと言ったんでしょうか、青山師範と言ったんでしょうか、師範学校卒業したての若い先生にお願いして、そして作文を教えていただいた。その時学校出たての若い先生が、今は学芸大学の作文教育の先生の望月久貴先生なんです。しかし作文の偉い先生だから、うちの女房が子どもの時に先生にお習いしたというのでもない。望月先生はその頃、まだ無名の先生でしかなかった。そして恐らく望月先生の指導よろしきを得たから、うちの女房が小説家になったというものでもないと思います。その頃のうちの女房というのは、要するにまだ作文の下手な小学生でしかなかったわけです。

問題は、うちの女房がなぜ作文が下手だったか。あるいは、私がなぜ国語が嫌いだったかということにある。つまり、彼女は結果論から言いますと、小説書きになるような女の子だったから学校の作文をうまく書いていくことが出来なかったんだと思います。学校の作文は、ある約束があるわけです。その約束に従って書いていかなくてはならない。その約束に従うと、自分が書きたいことは何も書けない。そして心ならずも約束に義理立てするから見るも無残な文章しか書けない。

現代国語というのも、それと同じで、先生と、出題者と解答者の間の、なんと言いましょうか、八百長じみた約束があるわけです。その約束を信じられる人は大変幸せなんです。しかし一度その約束をいかがわしいと思うと、これはもうどう書いていいかわからなくなるのが現代国語です。ですから、うちの女房よりも作文がずうっとうまかった人たちがたくさんいましたが、その人たちはだれも小説書きにならなかった。私より現代国語が出来る人が、ずうっとたくさんいました。私などは始終落第点をとっていましたから、ほとんどの人が私より出来たのですけれども、その中のだれも私のようにことばとか文章で飯を食うようにはならなかった。

それは、一つには資質の問題であると同時に、一つには環境の問題だと思います。私は文学青年くずれの父親と、新劇女優くずれの母親の、よく言えば恋愛結婚ですけれども悪く言えば駆け落ちした二人の間に生まれました。そして、両親がずっこけだったもので、小学校にはいるまで籍もない、小学校へはい

ることになって、あわててやっぱりこれはまずかろうというので、私にちゃんとした戸籍が作られたのだそうです。

そういう家ですから、私の家には仏壇もなければ神棚もなかった。国旗もなかった。私の家は大変貧乏で、赤貧洗うが如きありさまだったのですけれども、不思議なことに居候などが始終いました。その居候たちというのは、左翼運動やってつかまって留置場から出てきて体を壊したので、しばらく休養しているとか、あるいは売れない絵を描いている絵描き、または芝居をやろうとして、それだけではとても食えない人、そういう人たちでした。彼らが言ってること、してることというのは、簡単に言いますと無政府的なと言いましょうか、右と左に分けますと、左翼も左翼、いまの新左翼に一番近いような状態でした。

たとえば満州事変が起こりますと、私はやっぱり子どもですから、新聞や雑誌を見まして多門将軍が昂々溪において馬占山軍を破ったなんていうと、「うん、そうか」と思ったですけれども、すると側にいた女優のなりそこねの人が、こんなこと、ここでやっぱり人間が何百人か死んで、何百人の死んだ兵隊には全部母親がいたり、女房がいたり、子どもがいたりするということを、もう確実に教えてくれてしまう。

そうしますと、私はそれまで、勇ましく輝かしく見えた戦争というものが、急に陰惨な、憂うつな呪わしいものに思えてくる。反戦的な歌などを教えてくれる人がいくらでもおりました。私はそのとき覚えた歌の幾つかは、その後耳にしたことがない。だからあれはだれがいつどこで作り、どういう形で広まっていって、どこで消えていったのだろうかとよく思うのです。

そういう中で育ちますと、私はもう小学校にはいったときからうまく適応出来ないのです。修身の時間というのがありまして、学校の先生が、先祖とか、家とか、国とかいうものを教えようとして、たとえば皆さんの家に国旗がある人手を挙げてとか、仏壇とか神棚がある人手を挙げてというこれは授業の枕なんですよね。国旗がある、みんなの家には国旗がある。じゃあ国旗というのは何だろう、何のためにあるのだろうというふうなことから、国という観念を子どもに意識させたり、仏壇とか神棚とかいうものから、伝統とか先祖とかいうものをわからせようとする。

私は何げなく、「国旗のない人手を挙げて」といわれて「はーい」と手を挙げると、国旗がないのは私ひとりなわけです。ちょっと具合が悪いのですが、小学校はそれですみます。しかし、中学へ行きますと、国旗がないとか、あるいは戦争とか現実の日本の体制に対してどういうものの考え方、受け取り方をしているかというふうなことは、ただ「国旗がない人」、「はーい」では済まない。やはり学校側にいろんな意味で、自分の考えてることを明きらかにしなくてはならないことがある。あるいは明らかにさせられることがある。そうしますと、私は簡単に言いますと、不良になってしまうわけです。つまり戦時下の日本の状況では、実に困った少年になってしまう。

いまから思うと信じられないようなことですけれども、女の子と一緒に付き合うことは大変いけないことである。父兄の同伴なくして飲食店に行くのはけしからんことである。あるいは映画などを見に行ってはいけない。いろんなことが言われた。その割に公立の学校というのは割と冷酷なところがありまして、少しぐらいというか、かなり素行が悪くても試験さえちゃんと通っていればいいやというふうなところがありました。

ですから私は何とか助かっておりましたが、学校がいけないというようなことを私は、というより私の育った家庭ではだれも罪悪視しない。私が今日は具合悪いから学校休む、行きたくないと言っても、親は、そんなことではどうする、学校へ行けなんて決して言わない。勉強しろなんて決して言わない。やっぱり親は私を一人前に扱いまして、こういう映画があってこれ

はこうだとか、あるいはこういう小説があってこれはどうもおかしいとかいうふうなことを平気でしゃべっている。だから私もその話に参加するためには映画も見なきゃいけないし、学校がいけないというような本も読まなきゃならない。極端なことを言いますと、学校の中での私と家庭の中の私とが分裂したような状況になる。そこで私は、中学校から高校にかけまして、停学にはなるし始末書は書かされるし、おれはもう本当に将来世の中の落伍者になるんじゃないかと思った時代もあります。

先ほど、私どもの家に来た居候の中で、変なのがたくさんいたと言いましたが、その中の一人で非常に記憶に残っている人がいます。仮にZ氏としておきます。そのZ氏という人は、昔の改造社の小説のコンテストに佳作かなんかにはいった人です。今は新人の登龍門というと芥川賞が大変有名ですけれども、芥川賞というのは、確か昭和七、八年に出きたのでして、その前においては新人の登龍門というと改造社の懸賞でした。先ほど言いました宮本顕治の「敗北の文学」というのは、改造社のコンテストで一位になったものです。その時の二位が小林秀雄さんだった。そういうことから考えましても、改造社のコンテストに佳作になるというのは、ある程度の才能があったことだと思います。

そのZ氏というのは、大変貧乏な人だった。そこで次の小説を書くために私の家へ居候になりに来たのです。当時私の父は編集者をしておりましたから、毎日毎日飯を食うぐらいはなんとかなったのだと思います。このZ氏というのは、私の家に来まして本当に清たきり雀と言いますか、乞食の一歩手前みたいな服装をして、そのくせやたらに横柄で一日中ぼけっとしていて、原稿は一枚も書かない。午後になるとコーヒーを飲みに行くんですけれども、うちの母は彼がコーヒー飲みにばかり行って原稿を書かないからと、こづかいをやりません。すると、うちのおやじの本を持ち出して古本屋に売って、それでコーヒーを飲む。あげくの果てに、うちに一月足らずいたんですけれども小説を一枚も書かずにいなくなってしまいました。

それから数年経ちまして、昭和十五年たったと思いますけれども、私たちの一家が新島へ行くことがありました。その新島でバッタリ会ったのです。私はもちろん知らなかったのですが、父と波止場バッたり会ってわかったのです。その時のZ氏は托鉢の坊さんになっていました。彼は新島にやって来まして、一軒一軒物乞いして歩いていました。島としては、あんな坊主なんかいるとどうも風紀上よろしくないというので、隣りの島までの船の切符を買って追い出したわけです。追い出すために彼は波止場にいた。父はちょうど週末で東京から仕事が終わって帰って来るので、その船から降りてきたわけです。

乗る時と降りる時とでアッと思ってお互いに話し合ったのですが、父とそのZ氏はともにひどいどもりなので、「あ、あ、あ。」と言うだけで全然話は通じないんです。とにかく私どもが知ったZ氏はそれが最後でした。それから後のZ氏はどうなったかわかりません。つまりZ氏というのは、多分才能があったに違いない。しかし、それを生かすすべがなくて、そのままになってしまったのです。

セザンヌという絵描きがおります。この人の絵の仕事は、簡単に言いますと、一九世紀の絵を二〇世紀につなぐような仕事をしたのだと言えるかと思います。この人は五十の頃になるまでは全く無名でした。だれも彼の絵を評価しませんでした。そして彼が五十歳ぐらいになりまして、後に二〇世紀の絵をつくるようになるゴーギャンとかゴッホとかいう人たちが彼の絵を高く評価し始めた。だからそれによってセザンヌは後の世に残ったわけです。

セザンヌとエミール・ゾラという小説家は少年時代からの親友でした。そしてゾラは若い時から世に出まして、自然主義文学を作っ

たのです。その全盛時代には本当にヨーロッパ中の文学を代表するような勢いで物質的にも非常に豊かでした。ゾラは、自然主義文学ですから、あるがままに書くわけです。ですから、彼の身の回りの人間を書きました。セザンヌたち、絵描きたちも書きました。そしてそのセザンヌのことを、彼は、あり余る才能を持ちながらその才能を生かす才能だけを持たなかった人間として書いております。そして小説の中のセザンヌは、生活がいきずまって首をくくって死んでしまうことになっております。セザンヌは大変おこりまして、ゾラと絶交してしまいます。実際のセザンヌは首をくくって死なくて済んだのは、それはセザンヌの父親が大変な金持だったからなのです。セザンヌは貧乏していたことも事実なんですが、それは親の許さない結婚をしていて、親から充分な金を送ってこない。そのため大変貧乏でした。

彼の父親はセザンヌが四〇代の半ばになりますと、父親という人も年をとりまして、気もゆるんだのでしょう。セザンヌと妻子を受け入れるようになった。間もなく父親は死にまして、セザンヌは大変な財産を相続した。それでもなお彼の絵は売れませんから、彼はひとりの素人として、物好きな人間として絵を描き続けてきたわけです。そしてあるとき、五〇歳ごろになって、だんだん有名になってきたということは、さきほど申し上げたとおりです。

したがってもしセザンヌに父親がいなかったならば、彼は三〇代で絵をあきらめてしまったかもしれません。いや、絵をあきらめないまでも、ゾラが小説に書いたように首をくくって自殺したかもしれません。そうなった場合、彼の絵というものはどこに残ったでしょう。

私はZ氏についても同じことを思うのです。もしZ氏が家が豊かであったならば、彼は非常にだらしのないむちゃくちゃな人間でありましたが、とにかく彼の才能を伸ばすだけの物質的な、環境的な場所があったに違いないのです。ですけれども、彼はセザンヌと違って家が貧しかった。したがって彼の才能は活きなかった。彼はあり余る才能を持ちながら、自分を活かす才能だけ持たなかったのかもしれません。私はやはりそのZ氏のような人たちを身の回りに何人も見ておりまして、恐ろしかったのです。そして出来るだけ主流と言いましょうか、クラスの大半の人間が生きていくような道を生きようと思いました。つまり適当なところで妥協して、入学試験も受け、そして普通の人がいいと言う学校に行こうと思ったのです。それは私の妥協であり堕落であったとは思います。しかし私が大多数の枠の外側にいたというのは、私自身の資質によるよりも、むしろ環境的なものであったような気がして仕方がないのです。

私は一〇代のころは、私のクラスのだれに聞いても私のことを不良だと言います。私と女房が結婚するときに、女房の母親が、私の親しい友人たちに、「三浦というのはどういう青年か、娘をやって間違いない男か」と聞いたら、みんながみんな、口をそろえて、「もし自分に妹がいたらあいつとは結婚させない」と言いました。つまりそういう人間だったわけです。しかし、いまクラス会がありますと、昔の友だちは私に向かって、どうしてお前そんなにまじめになっちゃったんだと言います。つまり、五〇になった今日私は常識的な意味でのまじめを、そして規則正しい生活をしていると思います。朝六時に起きまして、家の回りを二、三千メートル走りまして、それからコーヒーを一ぱい飲んで机に向かって、ちゃんと一二時には昼飯を食って、そして三時か四時ごろまで直接間接仕事に関係のあることをして、それからそばのジムに行って体操をしたり泳いだりして、それから夕食を食ってという、本当に兵隊さんになっても勤まるようなスケジュールをしているわけです。それで、飲まず、打たず、買わずで

すし、本当に石部金吉のような人間だと私は思っております。肯定的に思っているんじゃなくて、少し恥ずかしがりながら思っているわけです。

それで私考えますのに、私はむしろ本質的にいまのような私が、私の本当の人格だったのであって、一〇代のころに枠からはずれていたのは、私自身の持ち味ではなくて、私の環境の結果、あんなふうになっていたのではないかと思うのです。私はもっとまともな、世間並みの親の下で暮らしていましたら、あのころのように一週間に一度は学校を休まないと、とても続かないなどと思わずに、毎日毎日学校をサボルことなど夢にも思わずに学校へ行っていたでしょう。そして女の子を追っかけるのは悪いことだと素直に考えていたかもしれません。どうやら私の本来、もともと持っている資質よりも、二〇歳ぐらいまでは環境というものが大きな力を私に及ぼしていたように思います。

いずれにしましても、そのころ私の知っていた不良たちというのを見ましても、三〇になり四〇になり五〇になるとみんなまともになっています。ごくまともな市民になり、ごくまともな夫や父親になっています。そういうことを考えますと、環境というよりも、あるいは青春というものがそういうものであるのかもしれません。つまり大人になりますと主流と言いましょうか、大体型にはまったような、一定の枠の中で暮らすことが辛くないというよりも、むしろそのほうが楽になります。朝一定の時間に目を覚まし、一定の時間に食事をし、一定の時間に仕事をし、というほうが楽です。しかし青年というものは、あるいは少年というものは環境がどうあろうとも、その人の資質がどうあろうとも、一定の枠が出来る以前の状態ですから、余計枠にはいりにくいのかもしれません。五〇歳の男の場合に、一〇〇人のうち七〇人がある枠の中にはいって、そして枠の外に出るのが三〇人とします。その同じ枠を一七歳の少年たちに当てはめた場合に、一〇〇人のうちその枠の中にはいるのは二、三〇人であって、七〇人はその外にいるのかもしれません。問題はその外に出ている七〇人を枠の中に入れることが、あるいは「はいれ」と薦めることが果たして適当かどうかということではないかと思います。

さきほど最初に釈迦に説法ということを申しましたけれども、皆さまのように日常青少年と接しておられる方々は、渡辺淳一という小説書きで外科医が言ったように、本当に人間というのはひとりひとりさまざまだということを痛感なさっていらっしゃると思います。同時にそれらの青少年というものをひとつの枠、あるいは二つか三つのグループに分類して、これはA型、これはB型というふうにして押し込むことが果たして意味があることなのかどうかということについて疑問を持たれる方もさぞかし多いと思います。

それでは大人としたら何したらいいのでしょうか。さきほど言いましたように、私は現代国語は非常に不得意だと申しました。現代国語がいろんな矛盾があるということを申しました。それならば現代国語というものをやめてしまったらいいのでしょうか。青少年や指導するのは面倒くさいことで、いろんな問題点があります。では、そんなことをやめて野放しにしたらいいのでしょうか。私はやはり現代国語というのはあっていいと思うのです。やはり皆さま方はもう本当にご苦労さまですけれども、是非とも勤労青少年の方々の面倒を見ていただきたい。現代国語があってよろしい。ですけれども、私は現代国語において成績が悪かったということを、積極的にも消極的にも評価していきたいと思います。つまり成績が悪いということ、それはもちろんマイナスの面もあるわけです。同時にこれは必ずプラスの面もある。つまり、おれは型通りの理解が出来ないから点が悪いのだ。その意味でなら能力が劣っている。しかし、お

れはおれなりの、おれしか出来ない解釈を持っている。その意味ではおれは優れていると考える余地を残していただきたい。

それでは国語の先生とか、あるいは青少年を指導していらっしゃる皆様方はなんのためにあるかというと、大変に失礼な言い方になるかもしれませんが、青少年によって乗りこえられるべき障害です。それは、たとえば皆さまや先生を岩にたとえますと、青年にとっては、岩があって岩にぶっかることが必要なのです。岩がなければなるほど真直ぐサッと流れていくに違いないのですが、岩があるためにそこに白波が立ち、水としてはいろんな問題に直面します。岩にぶっかることによって大多数の水は岩の左側に流れていく。しかし少数のいくらかの水は岩の右側に流れていきます。そのような形で、岩がなければ水は右に行くか左に行くかわからない。岩があるからこそ水はよかれ悪しかれ自分を思い知らされるのです。したがって私はもう一度学校の生徒になるとしたならば、国語の先生が「お前は特別な考え方をしている、それもいいんだ」と言って満点をつけてくれることを少しも望まないのです。やはり「お前はほかの子と同じような答えを書かないからこれは○点だ」と評価をしていただきたいと思います。

私はその意味で、嫌味や皮肉ではなく、私に現代国語に悪い点をつけて下さった先生の見識に感謝し、やはり尊敬しております。多分皆さま方も、日常若い人たちと接触されていて、これでいいのだろうかと、思い悩んでいらっしゃるに違いない。しかし私はやはりそれでいいのだと思います。思い悩んでおられるということ、それだけでもう十分なんだと思います。そしてそれからあと、皆さん方の思い悩まれた問題について、それをどう消化し、どう乗り越え、あるいは乗り越えずにそれていくかどうかということは、個々の青年たちの資質と環境と将来が左右することではないかと思います。本当に大それたことばかり申しました。

御静聴有難うございました。（拍手）

〈シンポジウム〉

勤労青少年と友情

―豊かな人間性を育てるために―

司会　東京大学教授　江橋慎四郎

講師　雇用促進事業団職業研究所研究員　岡本英雄

〃　富士写真フイルム㈱足柄研究所事務部主任　矢野雅義

〃　日本産業カウンセリングセンター理事長　野原蓉子

〃　横浜市勤労青少年ホーム館長　館倉博安

江橋（司会）　ただいまご紹介にあずかりました本日のシンポジウム「勤労青少年と友情」という主題での司会を仰せつかりました。きょうの会が実りあるものになるか否かは一にかかって司会の役割であるかもしれませんが、私はこういうことはあまり得意ではございませんので、むしろきょうここで四人の先生方がそれぞれのお立場からまずお話をして下さいますので、そのお話に対しましてむしろみなさま方がいろいろ活発にご討論や、質問をして下さいまして、なんとか私の役割が終ればいいのではないかと密かに思っておりま

すのでどうか一つ絶大なるご協力をお願いいたしたいと思うわけでございます。

始めにこの全体の会の進め方ですけれども、まず各先生方に十五分くらいの時間でそれぞれのお立場からのお話をしていただきまして、その後でまたそれぞれの先生方に補足を三分ないし五分ぐらいの間にしていただく。ひととおり先生方のお話が終りましたところで、みなさま方の質問なり、あるいは討論というふうにいたしたいと思います。恐らくご熱心なみなさま方のほうは直ぐ質問なり討論にはいりたいとお考えになるかもしれませんが、これは全く司会の独断でございますが、そこで若干休憩の時間をいただきたいと思います。前半一時間二〇分か三〇分ぐらいしたところで休憩をさせていただきまして、その間に、お願いでございますけれども、みなさま方が質疑なり、あるいはこういう問題についてもっと討論を深めて欲しいというようなことがございますれば、出来ましたら紙に書いてひとつ提出をしていただければ大変幸いに存ずる次第でございます。その休憩時間の間に若干そういうものを整理させていただきまして、それから後、後半を質疑応答、及び討論の時間ということで本日のシンポジウムを進めさせていただきたいと思います。よろしくご協力のほどをお願いいたします。

まず始めに「勤労青少年の特質と環境」ということで、雇用促進事業団職業研究所研究員の岡本先生からお話を伺いたいと思います。

（各講師の意見発表）

一　勤労青少年の特質と環境

岡本（講師）　私に与えられたテーマは、「勤労青少年の特質と環境」ということで、後のお三方がそれぞれ具体的な問題を多分お話になると思いますが、私はそれに先立ちまして、多少抽象的になりますが、勤労青少年の特質といったものを本題にはいる前に述べさせていただきます。

勤労青少年を取巻く環境ということでございますが、このレジメには四つほど挙げておきました。家庭、職場、地域社会、それにボランタリー・グループ。この他にもまだいろいろ環境と言えるようなものはございます。例えば、政治や経済の仕組みを含めた全体社会、あるいはマスコミュニケーションによって与えられる環境に類似したもので擬似環境とでも言いますか、そういったものが考えられますけれども、一応重要なものとしてはこの四つほどであろうと思います。それぞれが青少年にとってどういうふうな関係を持っているかということを極くかいつまんでお話ししたいと思います。

まず家庭ということでございますけれども、これは青少年にとっては、これは勤労青少年であっても、あるいは学生であっても同じですけれども、人生の中で一番その家庭から遠い位置にある時期ということに青少年期というのはなろうかと思います。子供の時代はもちろん親に非常に依存して成長して行くわけでありますし、また結婚してからは自分で家庭を作る、家庭の主人公になるという形ですけれども、青少年期というのは依存からはだんだん離れて行く、しかし未だ新しい自分の家庭というものを作り出すには至っていないということで、家庭との関係が一番薄いと言いますか、そういう時期に当るということになります。

この家庭がどういう変化を近年して来たかということですけれども、非常に目立つことは核家族化ということで、何世代もの人々が一緒に暮らすということが少くなって、親と子供だけと。子供も未だ結婚しない子供のう

ちだけ親と一緒に住むといった形の核家族というものがどんどんふえて来ている。それと同時に子供の数が減って来ているということで、親子の関係というのは数が少いだけに、ある意味では密接な関係になっているということが言えるかと思います。しかしその反面、親と子が育った環境や時代が非常に違って来ておりますので、いわゆる親子の断絶というふうなものも一方では目立つということで、二つの矛盾する傾向が家庭では見られるというふうなことが言えるかと思います。

次に職場ですけれども、この職場は、それぞれの職場によって非常に千差万別でして、勤労青少年との関り合いということで特徴的なものを探すということは非常にむずかしいわけですけれども、よく言われていることを挙げれば、親子の断絶というのと同じように、管理者と若い人とのずれと言いますか、そういったものが非常に目立って来ているということが言えるかと思います。これは仕事に対する考え方、あるいはその裏返しとして余暇に対する考え方、あるいはその組織というものに対する考え方、具体的には会社というものに対する考え方。そういったものが管理者の世代と非常に違っているということになろうかと思います。

もう一つは、勤労青少年との関係で特に触れておかなければならないのは、高学歴化ということです。これは全体社会が高学歴化しているということですけれども、非常に高学歴を経験した者の占める割合がどんどんふえて来ている。勤労青少年は多くは高卒ということに現在ではなろうかと思いますが、その上の大卒というものが非常にふえて来ている。そうすると高卒の位置というものが変らざるを得ないということになって来る。そのことが職場で影響というのは少くないと思います。

それから地域社会ということですけれども、これは現在の日本の社会では、重要性が非常に薄れて来ている。昔の村とか、あるいは都市では町内といったような、土地での繋りを基にした集団というものは現在ではほとんど機能しなくなっていると言えるかと思います。昔で言えば青年団のようなものがあって、地域に根づいたものとして機能していたわけですけれども、そういうものがほとんどなくなって来ている。

そうしますと、それに対応するもの、地域社会を基盤とした青年のグループというようなものが消えた後に出て来たものということで、ボランタリー・グループというものが挙げられるかと思います。

このボランタリー・グループというのは、地域的な繋りとか、あるいは職場での繋り、あるいは血縁的な繋りといったようなもの以外のことを契機にして、自分たちが自発的に作ったグループという意味でございますけれども、ホームでのクラブ活動とか、あるいはサークル活動といったものがその代表的なものです。それ以外にもそういったきちんとした集団でなく、例えば暴走族のグループであるとか、そういったものも自分たちが自発的に集っているという意味でボランタリー・グループという中にはいるわけです。

これは普通はかなり小さなグループでして、その影響力、そのメンバーに対する影響力というのは非常に大きいということが言われております。特に青少年に関しては、このボランタリー・グループの持つ重要性というのは後ほど具体的な例で多分示されることになると思いますけれども、非常に強いものがあるというふうに思われます。

このボランタリー・グループはいろいろな活動を目的として集まるわけです。例えば暴走族であればオートバイを乗り廻すとか、あるいはクラブ活動であれば種々の運動とか音楽とか文化活動、そういったものをするということが一応目的ですけれども、そのグループの果している役割という点から見ますと、友だちを作る、友だちと付き合うということが役割としては非常に大きなものになってい

るわけです。

勤労青少年を取り巻く環境ということとしてはそんなものが挙げられますけれども、とりまとめて言えば、家庭は非常に関係が薄くなっている。職場というのは非常に生活のかなりの部分を占めているわけでありますけれども、職場はいわば大人の世界でありますから、青少年が主人公というわけにはいかない。地域社会というのはほとんど機能していない。そうするとボランタリー・グループというものが青少年たちが自分たちで作って、自分たちが主たるメンバーであるという形で活躍する場ということになるわけです。

環境としてはそんなふうなことが言えるかと思いますけれども、次に青年期の特質ということが二番目として書いてあります。そこには準備期、あるいは猶予期というふうに書いてあります。一つ一つ細かく説明するつもりでしたけれども、時間があまりありませんので、簡単に述べますと、青年期というのはいろいろな考え方がありますけれども、従来よく言われていることは青少年の時期というのは大人の世界に対する反抗期というふうな形で捉えられるということであったわけです。大人の世界が現実的な世界であるのに対して、青少年はもう少し理屈っぽく、理想的な社会というようなものを目指して、大人たちが現実と妥協しているのを攻撃するというふうな形をとるということがしばしば起る。あるいはそれがうまく行かないために現実世界と真向から対抗するのではなくて、そこから逃避するということが起る。そんなふうな青少年期の捉え方というのがかなり一般的だったわけです。ところが青少年期というのは一概にそういう時期として捉えるというのも必ずしも適当ではないのではないかということも一方では言われているわけです。

どういうことかと言いますと、青少年期というのは、ただ大人の世界に反抗するというだけではなくて、逆の面から見ていると、だんだんと大人の世界にはいって行く準備をしている。大人の世界の考え方を行動様式などを徐々に自分の中へ取り入れて行くという、そういう時期だというふうに考える。そんなことが一方では言われているわけです。

これは相反する見方ということになりますけれども、実際には青少年期そのものを捉える見方の違いというよりは、かなりその時代時代の影響を受けている捉え方だというふうに考えられると思います。

一世代前と言いますか、少し前であれば青少年の時期を反抗の時期というふうに捉えるほうがむしろ正確であったということが言えるかもしれません。現在いろいろな調査、データ、研究などを見てみますと、必ずしもそういった反抗の時期というふうに捉えるのは、現在ではあまり適当ではないのではないか。確かに現在でも青少年は親の世代とは違った行動様式とか考え方を持っているわけですけれども、それはしばらく後にその大人の世界にはいらなければならないことはわかっている。それと真正面から対抗する気もあまりない。しかし、いまは未だ大人の世界にはいっていないで、少し大人の世界とは違うことをやってみようというふうに青年のほうはむしろ考えているのではないか。親の世代のほうも真正面から親の世代のことに反抗して、それを改革して行こうという意識があまり出て来てなくて、むしろしばらく親の世界にはいる前に楽しんでおきたいということであれば少しそれを許して、わがままだけれども少し許しておこうということで、若干の執行猶予を与えておく。大人の世界にはいれば苦しいことばかりなので、若干いまのうちは遊ばせておこうというような感じで、いろいろな青少年独自の、大人の目から見ればあまりまともでないというふうに考えられることも許しておこうということで、そこに猶予期と書いておきましたけれども、そういう猶予を親の世代も認める。子供の青少年のほうも大人の世界を真向から改革しようという気はあまり

なくて、はいる前に少し寄り道をして楽しんでおこうというような気持がかなり強いのではないかというふうな感じ、そういうふうな捉え方をしたほうが事実に近いのではないかというふうに考えております。

それから、三番目として「勤労青少年と友人関係」というふうに書いてありますけれども、ここでは諸外国との差異を世代間の差異ということを考えて見ようと思います。諸外国との差異というのをデータの示すところで見て見ますと、例えばこれは方々で引用された調査なので既にご承知かと思いますが、世界青年意識調査というのがありまして、そこで親しい友人、なんでも打ち明けられる友人がいるかどうかというような質問を世界の各国の若者にしているわけです。そうしますと、「いない」という率が日本だけが異常に高い。他の国と比べますと、なんでも打ち明けられる友人がいないということが他の国と比べると非常に多いわけであります。

ところが、そうすると友人関係に関しては日本は非常に貧しいと言いますか、あまりうまく行っていないという印象を受けるわけですけれども、もう一つの質問で、友人というのはどういうものが望ましい友人であるかということに関する質問があるわけです。それを見ますと、友人というのはなんでも打ち明けられて、非常に深入りをした全面的な人間関係を結ぶのが望ましい友人関係だという考え方と、あんまり他の人の内面には立入らないで適当な距離を置いた人間関係を保つ、それが友人関係としては望ましいのだという二つの考え方で、どちらをとるかという設問になっているわけです。そうしますと、日本の若者は非常に深入りをした友人関係というのが望ましい友人関係だというふうに答えている人が非常に多い。ところが他の国は、これは先進国も、あるいは日本よりも遅れて発展をして来ている国でも同じなのですけれども、もっと距離を置いた友人関係のほうが望ましいのだというふうに答えている人が多いわけです。そうしますと最初に友人がいないと答えた人が多いということも少し解釈を変えなければならないのではないか。つまり友人に対する期待が非常に高いので、それが影響して友人があまりいないというふうに答えているのではないかというふうなことが一応予想されるわけです。

そうすると、これとさきほどの猶予期と反抗期という捉え方との関係ということになりますけれども、この反抗期から猶予期というのは、他の諸外国、特に先進国の間でも観察されることだと私は思っていますが、他の国では比較的早くからこの反抗期から猶予期へという移行が起って来ている。それに対して日本ではそれは比較的新しいことであって、未だそう歴史が経っていない。そういうことの影響と言いますか、そういうようなことで友人関係、友だち付き合いということに関しても未だ全面的に新しい考え方に変って来ていない。新しい考え方といいますのは、要するに友人と言えども距離を置いた人間関係が良いというふうな考え方に、徐々にではあるけれども移って行くのではないか。現在のところは未だ旧来の友人というのは全人的な関係というふうな考え方があるのではないかというふうに考えているわけです。

世代間の差異というのもいま述べたような形になっているわけです。少しまとまりが悪いのですけれどもまた後で補足することにいたしまして、一応私のレポートというのはこれで終りということにさせていただきます。

江橋（司会） どうもありがとうございました。

勤労青少年の友情の問題を考えるに当っての今日の青少年を取り巻く環境とか、あるいは現在の青少年の関係ということについて触れていただいたわけですが、続きまして、勤労青少年と職場の人間関係ということで、職場を中心としてのお話を富士写真フイルムの

矢野先生からお話を伺います。どうぞ。

二　勤労青少年と職場の人間関係

矢野（講師）　私が申し上げるのは、企業の立場から最初のレポートをしなければならないのだろうと思います。さきほど岡本先生がおっしゃいましたけれども、職場という所は千差万別であってということなのですが、その千差万別の一つの例でしか申し上げられません。

私は富士フイルムに勤めておりまして、富士フイルムの実態だけしかわかりませんが。その辺はお許しいただきたいと思います。

岡本先生は見事に職場の問題、ポイントを論じられているわけです。一つは管理者と若い人のずれ、もう一つは高学歴化、正にその二つがキーポイントで、ここからいろいろな問題が起きているのだろうと思うのです。一応レジメに従って申し上げますと、はじめに、いま青少年が企業の中ではどういう状況なのかを申し上げたかった。一体これからどうするのかというようなことでまとめて行ったつもりなのです。

一番目に、体格はよいが、体力、忍耐力は弱いですが、私どもが感じますのが、きょうの主題と関係ないかもしれませんが、最近の若い人、特に青少年と言った場合に、非常に体力がなくて困ってしまっているのです。実際私どもへはいって来ます高校卒と言いますのは一年ないし二年、まさに企業の中への猶予期で、いろいろな勉強の期間を与えているわけですが、一番気づかなくてはいけないのは体力作りなのです。入社して最初二〇〇〇メーター走らせますと、もうみんなヒーヒーフーフーしてしまう。一年も鍛えて行くとだんだんその体力も伸びて行くわけですが、大変耐久力というのですか、忍耐力というのは弱い。本当に体を鍛えているのだろうか。青少年の特徴は一方では一番体を鍛える時だろうと思うのですが、その体の鍛え方が大変不十分である。もう一つそこで言いたいのは、体力をぎりぎり一杯まで使って、その中で裸で付き合う友だち関係というのが一つ足りない、あるいは限界まで体力を使ってそこでビタット来る友人関係というのは非常にいま少いのではないかということも一つ言いたかったわけです。

二番目に申し上げたかったことは、表面的な仲間との触れ合い、先輩との触れあいのぎこちなさということなのです。企業の方はご存知だと思いますが、毎年生産性本部という所で若い人たちの意識の調査をやっておりますが、さきほども例が出てまいりましたけれども、こんな設問がございます。「仕事や職場の中のことで悩みごとや不満がある場合、誰に相談しますか。」こういう設問に対して、企業の中で人事なり労務なり、私どものような仕事をやっている人間が一番に期待したいことは、上役なり先輩なりという人がちゃんとめんどうを見ろよということなのですが、意識調査の結果では全然だめなのです。上役や会社の相談係やあるいは先輩というのは全然頼りにならない。四十九年、五十年の調査は全てそうなのですが、誰に相談するかという場合に上役や会社の相談係を選ぶというのは、わずかに四％、あるいは五％を割っている数なのです。圧倒的に多いのが職場の同僚でそれは五〇％を超えております。五十年の調査では五四・五％です。職場以外の先輩や友人というところでは二〇％前後あるのです。「実際に付き合って、いろいろな悩みや問題があった時に頼りになるのは誰か」と言ったら、実は仲間だと言っているわけです。上司や先輩ではない、あるいは相談係ではない。ではその仲間、同僚との人間関係というものがどうなるだろうかというと、これも岡

本先生がさきほどおっしゃったように、どうもむしろだんだん距離を置いた人間関係になりつつある。だんだんそちらのほうに芽ばえつつあるということでしたが、私の実感では、むしろそちらのほうになって来ている。ビタッと何もかも全人的な関係の中で友人を求めているのではなくて、かなりの距離を置いて、おれはおれ、あいつはあいつというように、もう既になっているという感じが非常にいたします。私は古い価値観に立っているのかもしれませんが、どうもそれにもの足りない。一番自分が苦しんだり悩んだりする時の仲間というのは、その中の連帯というのは非常に大事なことなのだろうと思うのですが、それが何か一番頼りにする友人ですら距離を置かなければいけないとなると、誰と一体結んで行くのだろうかということに非常に危機感を感ずるような次第なのです。

もう一つ言いたいことは、先輩との関係が非常にぎこちなくなって来ていることだと思います。

どうも従来が縦の関係で結ばれた職場の関係だったものが、かなり横の繋りの関係になって来ています。しかし横の関係の結び方ということ自身が未だ本当に定着した関係作りが出来ていないような気がします。縦の関係は指示は従順に守ろう、あるいは上に対してはいろいろな問題提起をするとか、いろいろなルールがいままであったように思うのですが、上下の関係の結び方はあったと思うのですが、それが崩れ去っていって、ではその横の関係の中でチームを組んで何かをやる。だんだんその方向に向かいつつあるのですが、しかしその結び方に未だルールが出来上っていず、まだまだぎこちなさがあるということを、ここで申し上げたかったのです。

三番目に申し上げたいことは、どんな目標を持っているかということです。そういう横との関係、あるいは先輩をとり込んだ関係、チームを作っていく関係という中に仲良し集団というのが大分芽ばえて来ているけれども、なんかの課題を追って、一緒に取組んでその課題に向ってやろうというような、そういうような仲間関係の作り方が非常に弱くなっていると思います。もし仮りにある課題を追って、ある目標を追って一緒にチームを組んでやって行くということが出来ていったら、その中では課題指向のためのお互いに意見の対立があり、意見の対立の中からなんかを生み出すという本当のチームワークの動きが出て来るだろうと思うのですが、実はその辺が大変下手だと思うのです。そこにいろいろな問題を感じます。どうやら自分に対立する異論、あるいは自分とは違った意見に対して対処の仕方というのはなかなかわかっていない。そこは「意見の相違だよ、見解の相違だよ」と分かれてしまって、ディスアグリーの中から新しいものを生み出して行く。そういう力が非常に弱いという感じを持ちます。最近の人たちは話し方は大変みんなうまくなって来ているのですが、どうも根本のところへ突っ込んで何かをするということになりますと、むしろ古い世代のほうが得意なのではないかという気がするわけです。

このように考えて来ますと、一の目標という問題にはいって行くのですが、ある目標があるからとそこまでやって行くのだろうと思うのですが、果してどういう目標を持っているのだろうかということになって来ます。これは単に若い人たちだけの問題ではなくて、実は私ども管理者クラス自身がだんだん目標を見失いかけて来ている。そのせいでもあるのだろうと思うのです。

ここで申し上げてみたいことは、一つは若い人たちにとって職場の中で目標を持ちにくくなっている状況、それは管理者自身が持ちにくくなっていることの反映でもある。一つは高学歴化ということがさきほど言われましたが、確かに私どもただいま研究所の中にいるわけですが、研究所になりますと四分の一が大学、大学もまさにマスター以上なのです。

そしてバチェラーになりますと、それを入れますと半数が大学卒になります。そこで若い高校卒の人たちがどんな目標を持って行くのか。自分が努力し勉強して、そして自分をどうあろうとさせているかと言いますと、最近どうも「とてもじゃない、かなわない。」これは大学の学部卒の理科系の人間でもそうだろうと思うのです。マスターがおり、あるいはドクターが上におりますと、だんだん学部卒の人も昔の高校卒と同じような状況になりつつある状況だと思うのです。

それで、自分が企業の中でどう自分を磨きあげていくのかという目標というものはだんだん見失いつつあるのではないかという気がします。彼らは彼らなりのなんらかの職場に果す役割というのがあるはずなのですが、昇進とか、上へ上へと登って行こうとかいうような目標ではなくて、何か自分の個性を生かした目標付け、方向付けというのが必要な段階になって来ている。しかし、それを未だ管理者自身が与えきれない状況、その中で夢を見失って来ているというところが実態なのではないだろうかという気がいたします。

四番目にはイージー・ゴーイング許す甘えの環境ということです。いままで申し上げたようなことを通じて申し上げたいことは、青年の時期というのはやはり自分を成長させる大切な時期なのだろうと思うのですが、ある課題にぶっかって、そして自分の力を確かめて、そして時には挫折して、そこから友情の暖かさの中でまた新しいものにチャレンジして行く。また挫折から立ち直って行く。そういう大事な時期なのだろうと思うのですが、実はその時に、どんな目標に向って行くのかというところもだんだんとぼやけて来ているし、ではそこで自分を試してやろうという課題もだんだんぼやけて来ているし、その意欲もなくなって来ている。またそちらの方向にハッパをかける先輩もいなくなって来ているという状況です。上司や先輩も、理屈ぬきに「ノー」ならノーとはっきり壁のように立ち塞って行く場面があっていい。いうなれば職場における父親ロールというものが非常になくなっているのだろうと思います。これはさきほどの先生のお話ですと、猶予期だそうで、「若い時に後になったら苦しむからいまはゆっくりやっていろよ」ということなのだろうと思うのですが、そればかりでなくて、実はその上司なり先輩なりが厳しく何かを言うことについて、自信を喪失していることがまた一つのポイントなのではないだろうかという気がいたします。しかし本当はそこで壁になり、あるいは岩になり、そして自分の力を思い知るような、そういう職場状況を作らなければいけないのだろうと思うのですが、どうもそうはいかん。上司や先輩も自分の課題を迫うのに一生懸命というような状況なのだろうという気がします。

次に達成動機と失敗回避について言いたいのですが、要するにそれでも若い人なりにいろいろな問題にチャレンジいたします。チャレンジするけれどもそう簡単に成功するものではない。そこで失敗します。失敗するとそこに挫折感を感じます。そこでこそ仲間の友情関係が必要なのですが、それが実は本当に励し合う関係になっていないものですから、そこから回復することは出来なくて、ただ挫折感のみに終ってしまっているというところがあるだろうと思うのです。そうしますとどうも失敗回避傾向のほうが強くて、「ここでなんとかいっちょうやってやろう」というような方向へのリードの仕方というのは、本当は必要なのですが、なかなかそこへ手がまわっていない状況です。

五番目に言いたいことは、白紙の彼等に体験の場をということです。いろいろと問題のほうばかり申し上げてみたのですが、それでも何か彼らに期待しなければいけないことがあるはずで、職場は職場なりに大変な苦労をする。一言で言って一番大事なことは、彼らに彼らなりのリーダーシップを発揮する場を

職場の中に与えられないかということなのです。彼らなりの個性を発揮する場がいろいろとあるのです。それがいま私どもの努力の一番のポイントになっています。例えば、みなさん方もご存知かと思いますが、職場のいわゆる小集団活動というのは、そのポイント。あるいはQCサークルだとかZD運動だとか、各社なりのいろいろな職場の小集団活動があります。それが軸になります。あるいは職場の中のレクリエーション活動というのがあります。これも職場の一体化を図って行く上での大切な機能を果しているのですが、それを企画し運営をして行くというのは彼らがまさに一番リーダーシップを発揮する力もあるしアイディアもあるしといったところで、彼らにそういう場を与えて行く。あるいは彼ら自身の勉強の場を与えるという意味で、社宅を開放して「自由にやれよ」というような場を与える。要するに体験し、自分たちがリーダーシップをとってやれる場というものをどう作ってやるか。これにはまた現場には批判がありまして、そこまで彼らに過保護でなければいけないのかというような批判が一方にはあるのですが、しかしなんとか体験で自分たちが課題にぶっかって、チームで課題にぶっかって、失敗してまた立ち直って――と、そういうような体験の場を与えて、彼らなりに個性に目覚めさせて、自分なりの役割を自分なりの機能を見い出して行くというところに私どものいまの焦点があるというようなことでございます。

非常に雑駁な話になりますが、体験の場から考えていることはそういうようなことでございます。

江橋（司会） どうもありがとうございました。いまお話を伺いましたように、多くの勤労青少年が具体的な働く場所を持っているわけでございますけれども、そういう職場から見た今日の青少年の人間関係の特色を捉えて下さいましたし、またその特色に対してどういま職場自体でお考えになって今日の勤労青少年に対処しているのかということを話していただいたわけでございます。

次の講師は日本産業カウンセリングセンター理事長の野原先生です。

それではお願いいたします。

三　勤労青少年の友人関係の悩み

野原（講師） 私は大企業、中小企業、銀行、デパート、大変さまざまな企業の七社ほどフリーのカウンセラーとして相談に当っている者でございます。その中で特にここには若い人の代表が「こういう悩みがいまあるのだ」ということを言っていないわけですから、その現状を出来るだけ詳しく事例をお伝え出来ればと思っております。

さきほどから岡本先生、矢野先生がおっしゃいましたが、若い人達に「最も楽しい時はどういう時ですか」と聞けば必ず「友人となんでも打ち明けて話している時」とか、「ともかく本当のことを話せるというのは楽しいですね。それは友人との間しか出来ない」とか、そういったことでなんにも考えずに自分を出せるような場はもうそとだけなのだと言っております。まさに青年の世界は友人の世界だということが言われておりますが、そういった状況を聞きまして、さきほどの調査等もそういうことを言っているのですが、私たち指導者、また年輩層の方、家庭、職場、さまざまな方はそれを聞くと少し何か無視された気持がする。なんでもっと自分たちに話してくれないのだろうとか、何を考えているかその気持すら掴めない。そういう気持があるわけでございます。ともかくいま人間関係は友人のところのみに非常に執念を持って、友だちをともかく作ろうということでございま

すが、そしてその中でのいろいろな体験があるわけです。「いままでで一番自分の性格などに影響を及ぼした人はどういう人ですか」と聞けば、親などがたまには出て来てもいいと思うのですが、私の聞いた範囲では、ほとんど友人とのいろいろな体験、後で申し上げますが、そういうふうなことを言っていることでございます。

それだけの期待を持った友人関係が一旦崩れれば、これはもう大変に深刻な悩みになるということでございます。私の見て来た範囲では、後からいろいろ担当の方のご意見もいただきたいと思いますが、友人関係の悩みは大体中卒の男女の方から、一五才から二〇才ぐらいまで、この辺の人達に圧倒的に友人関係の悩みが多いようでございます。その内容というのをいくつか申し上げますが、さきほど深入りの、全部一致しなければ気が済まないというようなことも日本的な考え方としてあるのではないか。それが距離を持つ関係に変って行くのではないかというようなお話もございましたが、ともかく二〇才ぐらいまでは大変裏切られただとか、涙を流されたとか、友だちだったらそんなことはしないはずだとか、自分のほうは随分いろいろしてあげているのに相手はこのぐらいしか、これほど困っているのにしてくれなかったとか、さまざまむき出して争います。若い人のなかには自分は大学に行かなくて良かったという高卒の人がいますが、それはなぜかというと、高校時代には友人とうんと議論が出来た。進学がなかったからそれだけ時間があったから、本当に喧嘩したし、その結果、もう何年もどんなことがあっても変ることのない友だち関係が作れたということを、男女ともに私に話してくれるわけでございますが、そういう時代、それだけ議論したり、戦ったり、争ったりした人たちほど大変いい友だちを、これは崩れないというような友だち関係を作っているわけでございます。具体的な例を申せば、ある寮の仲が良かった二人の男子が仲違いをした。どうしたのかなと思って一方の子に聞いてみますと、彼の友だちの方の男性には恋人がいるのですけれども、彼は恋人に対して冷くしている。ちょっと若い時は粋がりまして、「おれはもてるんだ」という感じでいろいろな自慢話をしたりするむしいのですが恋人の女の子を粗末にしているではないか。こっちの子もその女の子に少し関心があるものですからおもしろくない。そういうようなちょっとしたことでこの時期は大変な仲違いをする。そして彼に聞いてみましたら、これは本当のなんでも悩みを話せるような友人、親友になれるかどうか試しているのだ、確かめているのだと言うわけです。いろいろなことを見ては「あっ、だめじゃないか」とか、「そういうようなやつでは信頼出来ない。なんでも言える相手ではない」とか、そういうようなことを探っている時期ではないかと思います。また別の中卒の女性の事例でございますが、現在は非常に男女のセックスの問題が大変エスカレートしており、低年令化しております。友だちが深夜喫茶店に行く。仕事が終った後夕方出ていって男の人のアパートなどへどんどん行く。自分はそこまで行かれない。だけど友だち関係は続けたいが低年令ほどそれが出来ない。距離が持てないと言いましょうか。全部同じにしてもらわないと友人関係がそこで終りになってしまう。だからエスカレートした女の子のほうは男の子のところに「あんたも来てよ」と友達を誘う。そこまではついて行けない人はしばらく会社と家と往復して、彼女とちょっと離れていようとするけれども、あまりに寂しくて、またそこへ出て行く。そのうちに一緒の行動をとるというわけです。暴走族の人たちとも随分話し合いましたが、あの人たちの不安やそういうものが症状として暴走なんかに出ている。そういうことをなんで表わしたらいいか、体で表わすのは暴走族なのだというようなことをいろいろ話していますけれども、仲間を引き込むといいまし

ょうか、同じ行動をしなければ許さないみたいなところあたりがまだその年令では非常に盛んでございます。

さきほどお話にも出ましたが最近の若い人達は非常に表現がうまくなった。言いたいことを言う人たちがふえて来たわけですが、そのためにかえって、表現出来ない、口下手な人たちは、友だちが相手にしなくなる。そのための悩みというのは非常に強くて、そこで思い切ってその友だちについて行こうとして性格まで変えたり、大変劇的な家出をしたりとか、いろいろな行動をとってまでもそこに友だちをなんとか作ろうというような事例もあるわけでございます。

また、さきほど青年意識調査のお話も出てまいりましたけれども、異性との友人関係ということですね。恋人関係まで行かない、異性と友だち関係がもてるかどうかというのは、日本は非常に少くて四十七年のあの調査でも欧米一一か国でも六から七割の若者が友人がいる、親友がいると答えた若者について、それは同性か異性かというと「両方だ。両方いる」というのが六から七割ということでしたが、日本の場合には二割方程度という結果が出ておりました。私の見た最近三年間の事例を見た範囲では共学が徹底したということでしょうか、異性と巡り合えるチャンスが非常に多いということでしょうか、都市周辺ではそういった同性とか異性とかの区別なく友だち関係を持とうとしている。しかしそこに悩みは周りが理解しない、親が理解しない、会社の人が理解しない、友だちでもそういうものを認めないので、「あれは恋人がいるのにまだ他の女の子とたくさん付き合っている」とか、「おかしいではないか」とか、そういう噂などがあって挫折することもございます。その辺が新しい傾向としてこれからどうなるかなと思っています。

大学卒の方はちょうど結婚年令に近いせいか割合い異性との友情というのは持ってないようでございます。むしろ中卒、高卒の人たちに学校時代のお友だちにいまでも会うと、男の子、女の子たくさん集ってグループでつき合いが上手でございまして、その辺がどうなって行くか。結婚等にもいい影響が出て来るのではないかと思っております。

さらに最近のいろいろな問題がございますが、職場で友だちを作らない傾向というのはお気づきではございませんでしょうか。私は非常に最近感ずるのですが、さきほどの先生もおっしゃいましたが、自発的に形成した集団で好き同士とか、それから親友なんていうのは良く調べてみますと性格などの違う相手が多いですね。非常に性格が違う。自分にない魅力がある。自分と違ったものを持つ相手だというようなことを言っておりまして、さきほどのお話にあった共通目的を持ったフォーマルなグループというものでの友人関係は浅く付き合おうとしております。ですから職場の関係、そういう中の付き合いは、ちょっとお茶飲みぐらいには行くけれども、旅行までは行きたくない。旅行は高校時代の友だちと行こう。高校はある意味でフォーマルな、学校というのはそういう目的を持った集団ですけれども、そこでは大変友だちを作っておりまして、それ以上枠を広げない。なぜかと多くの若い人に聞いてみましたが、それは友だちを作るのにどれほどしんどいかという、さきほど言いました、争うといったようなこと、いまさらあんな真似は出来ないと言いましょうか、少し年令が行くにしたがって他人のことであれだけ真剣になれないとか、そういった面が出て来まして、また男性ですとライバル意識ですね、同期の入社とか、そういう関係があって、さらに同じ職場に来る人間はバラエティーに富んでいない。むしろ他の地域で知り合った相手のほうがいろいろな人間がいるではないか、同じ職場に来る人たちは似ているし魅力もないではないかということ。さまざまあって職場で友だちを作ろうとしていない。社内のレクリエーションとか、

社内の旅行等に参加しないだろうというようなこともそこから出て来ております。ここにはいろいろな勤労青少年ホームで若い人の余暇のことをご熱心に指導なさっている方がたくさんおいでですが、企業の中のグループ同志でそういうところに出かけて来る人も減って来るのではないかと思いますがどうでしょうか。そこまでの親しい関係を作らない。外にまで一緒に出かけて行って、どこかで一緒に楽しもうとそういうことまで行かない。むしろ友だちは別のところで作っているというふうに私は感じております。

さらにこの人たちは、さきほど距離をおいた、深入りをしない人間関係、友だち関係になるのかならないのかという問題提起がなされていますが、私はそれについてもたくさんの例を見ております。二人とも相当悪い男の子、従業員の人たちから二人悪だといわれる人達ですが、これは「限りなく透明に近いブルー」ではございませんが、あの辺に出て来る薬については、ああいったような薬を飲んでみたりとか、暴走族、そういったこともするし、フリーセックスの相当過激な感じのこともするし、さまざまな悪いことをする。おれたちは悪なのだというような仲間同志なのですが、一方が非常に悪くなると片方がちょっとまじめになって又句を言ってみたり、それを補いあったり、いろいろな意味でお互いに違っている。議論してお互いの違いを認める。それ以上はたまにはそこでぶっかるのは必要ではないか、さらにその違いを認めあって、そして別の生き方をして行く。そしてある時にどっちかが倒れる。「なんだおれが言ったとおりだったではないか」、やっぱりお互いに主張する。「おれはこういう考えだ」、「おれはこういう考えだ」ということはお互いに十分言ってありますから、そこで「おれの言うとおりにすればよかったではないか」、「それみたことか」とは言わないわけです。彼らと友人関係ということで随分話し合いました時に、自分の父親や上司や年輩の人は、もし自分が挫折したら「お前、前に言ったではないか。あの時やらなかった、お前が、だから悪いのだ」と言うだろう。そういう言い方をしたらもう友だち関係は終りだ。いざ挫折したらだまって助ける、なんとしても助ける、というようなことを、またそういう弱味をみっともないから友だちの前で見せたくないといったら見ないふりをしていよう。手とり足とりあまりやり過ぎて失敗した。一人立ち出来ていない。そういう意味でお互いが小さくならないようにしようというわけです。あれは精一杯の思いやりなのだとか、そういう割り切りをしまして、それ以上に期待しないい。そういうことでお互いさびしいとか、そういうことをある意味では無視してみたり、「そんなにベッタリして来ないでくれ。友だちは同情でなるのではないのだ」と言うわけです。これは女性でも同じでして、こういうことをデパートとか銀行なんかのお嬢さん方でもこの頃おっしゃっているところに私は少しいい意味の距離感、一人立ち、みんな一人づつの人間として生きて行かなければなりませんという考えがだんだん出て来ている。ちょっと若い人について楽観論を持っており、非常にいい傾向ではないかなということを申し上げます。

もうほとんど時間になっておりますが、最後にやはり申し上げたいのは、さきほど富士フィルムの方もおっしゃったとおりでございまして、その若い人たちの悩みというか、相談や、生甲斐や、全部友人同士同じ年令のところへ行ってしまう。大変深刻な相談も同じ年の友人、そういったところへ行ってしまって、その辺にどういう問題が生ずるかということでございます。

やはり私たちは、私たち　私なんかは大変未だ未熟でございますが、先輩層リーダー層の方々は追いつめられ経験と言いましょうか、何か追いつめられて、それをなんとかしなければいけない、でも無理ではないかと思

ったけれども、どうしょうもなくて断崖絶壁に立たされて追いつめられて限界を越えた経験―あのときはよくやったなというような、そういう経験がなにかおありではないか。それが自信となっていらっしゃるわけなのですけれども、いまの若い人たちには追いつめられる経験というものが少いわけなのです。悩みはいろいろあるのですけれどもそれ以上に、ではどうするのだと追いつめるものがない。友だち関係も本当に挫折すれば助けるだろう。その時は慰め合って孤独を癒す。その辺はやりますけれどももうちょっと本当に自分はどうしたらよいかというようなところに迫まる場面は、さきほどの先生のお言葉どおり非常に少い。そういうことがないために、いつも自分はなんか経験していないのにしたような気がしたり、血を流したことがないのに流したのだみたいな経験を感じてみたり、そういう本当の自分というものがどの程度の人間かも摑めないのですね、その辺が若い人自身の深刻な問題です。それはいまの若者はしょうがないなというのではなくて、非常に深刻ないま時のこういう時代に生きた若い人が、自分でそれをやらないで済ましているのではないかということ、その辺これからどうなるのかなということが私は心配です。さらに理屈族というのがありますね。「こうするものだよ」なんて言うと、「なぜですか。なぜそんなことをしなければいけないのか」というのがいまの教育であり、それに納得させて「こういうことだよと」やっぱり話さなければいけないわけですが。なかには、うまく話せないこともありますね。「理屈ぬきの世の中の価値観のものもあるのだよ」とも教えるのですけれども。それともう一つはフィーリング族と言うか、いやだとなったらやらない。理屈というようなものではない。そういう人たち。これはやや低年令の人たちにございますが、そういうような人たちにやはり私たちは何かこう心暖まる話し合いと言いましょうか、なんでもいいから話して行くと言いましょうか、それが大切だと思います。暴走に走ったり、大変問題行動をするのは、不安やいろいろなものの一つの症状と考えて、それをいいか悪いかと決めつけたり罰したりしないで、その裏の気持を汲みとれば、何か私たちでもあの人たちの中に、はいっていけるものがあるのではないかと思います。また後で付け加えてみたいと思いますが、大変長く話してしまいました。

江橋（司会）　どうもありがとうございました。

特に青少年の人間関係、あるいは友人関係ということに焦点を絞って、それに対して実際に起っている悩みにはどういう悩みがあるかというようなことの具体例を中心にしてお話していただき、なおまたそれに対してどう対処して行ったらいいのかについての若干のヒントを与えていただいたわけでございます。

では最後に横浜市の勤労青少年ホーム館長熊倉博安さんに「地域社会における勤労青少年の友人関係を通しての育成」ということで、ホームを中心としてのお話をしていただくことにいたしたいと思います。ではお願いします。

四　地域社会における勤労青少年の友人関係を通しての育成

熊倉（講師）　最初にテーマを与えられました時に、「地域社会における勤労青少年の友人関係を通しての育成」というテーマでございましたのですが、横浜の実態を申し上げまして果して現在横浜の地域社会と言われている所に、そういった青年集団というものは存在するだろうかということをまず私考えまして、はたと困ったようなわけでございます。

従来の地域社会と申しますのは、さきほどもお話にございましたように極めて地縁的、

血縁的な形の中での地域社会がございました。その中におきます青年集団というものも、例えば昭和二十七、八年頃、青年集団といいますとまず青年団。つまり地域青年団というものが極めて大きな存在としてあったわけでございます。これは一つの学校で言えば同窓会的な、そういった仲間、こういったものが地域におきましていろいろ地域との関り合いの中で青年の活動を実施しておったわけでございますが、その後いろいろな経済成長、そういったものの変化がございまして、この地域社会というものが崩壊の方向に行ったわけでございます。

横浜におきましては、現在、人口二六〇万でございますが、ちょうど勤労青少年ホーム、私どものホームが出来ましたのがいまから六年ほど前になりますが、当時は大体人口が二〇〇万前後だと思います。その頃の人口増加が一〇万人づつ毎年ふえて行ったわけでございます。その一〇万人のふえ方を大ざっぱに申し上げますと、四〇万人の人が入ってまいりまして、三〇万人の人が出て行った。したがって横浜市という全体の枠の中から見ますと、一〇万人ふえたわけでございますが、さらにその中におきまして一年間に九万人の人が市内の中で転居をしておる。つまり二〇〇万人近くの人口の中で合わせまして八〇万近くの人が一年間の中に動いておる。こういう極めて流動化した形の中で、従来の地縁的な地域社会というものが崩壊して行くのは、これは当然であろうかと思います。これは極めて顕著な例でございますが、みなさま方の地域におきましても似たりよったり、これと同じような人口の流動化というものが行われていたのではなかろうか、また現に行われつつあるのではなかろうかと思うわけでございます。

こういう中におきまして、青年の一つの友人関係というものがいかなる物理的な条件の中で作られて行くかということを考えますと、私どもの勤務しております勤労青少年ホームというものが極めて重要な役割を持っておるのではなかろうかというふうに感ずるわけです。

そういった状況の中での青年集団といいますものは当然、地縁的、血縁的なものから一つの目的集団的なものへと移って来ておるわけでございまして、つまり脱地域化という形の中での青年活動、これをホームの中におきます具体的な活動として考えてみますと、どこのホームでも大体同じような傾向であろうかと思いますが、まず一つは、お稽古ごとのような集団活動、グループ活動でございます。つまり生け花であるとか、あるいはお茶であるとか、あるいはまた料理であるとか、そういったお稽古ごと的なこと。あるいはまた実務的なことというような形でペン習字のグループであるとか、あるいは英会話のグループであるとか、そういった何等かの形で職業とか、あるいは生活に結びついたそういった一つのグループ活動でございます。あるいはまたリクリェーション的なグループであるとか、あるいはまた教養文化的なグループ。こういったことが常日頃私どもの勤労青少年ホームにおいて行われておりますグループ活動でございます。

このグループ活動を眺めてみますと、さきほど矢野先生のほうからお話がございましたように、いわゆる仲良し集団と申しますか、お互い同士一つのことを行う上におきまして、協力はしてやっておるけれども、そこには極めてぬるま湯的な人間関係、友人関係と申しますか、その域を出ないように私には感じられるわけでございます。もちろんこういった仲良し集団というものを私は青年が成長して行く過程の中で否定するものではございません。これは非常に大事なことだと思います。しかしそれが全てであった場合に、果してよ

り豊かな人間性を持った青年として成長して行くであろうかということを考えました時に、私はやはりそういう状態だけでは極めて不十分ではないかと私は感ずるわけでございます。

先般ある調査の結果を見たのですが、その中で、地域社会に住んでいる住民がお互い同士の関り合いについてどういう考え方を持っておるかという調査をしましたところ、特にそれをお互いの相互扶助という面で捉えたところ、一つの答えとしては、「私は決して他人の世話にはなりたくない。しかし私自身も他人のめんどうは見たくない」と、こういった答えをしたのが職業的にはサラリーマンの層に非常に多かったそうでございます。一方「この世の中はお互い同士助けられたり助けたりしながら生活して行かなければわれわれは生きて行けないのだ」と、こういう相互扶助の考え方を持った層といいますのは、主婦とそれから自営業者、それから小学生に多かったそうでございます。小学生は別といたしまして、主婦と自営業者の場合には、生活の実態の中にそれなりの体験なり経験なり考え方があるのではなかろうかと思います。またサラリーマンの場合には、むしろそういったことについて脱地域的と申しますか、そういったような生活体験を現にしているところから出ているのではなかろうかというふうに考えたわけでございます。

そういった背景の中において、勤労青少年ホームの中におきますグループ活動というものが仲良し集団の域を出ないで活動しておるということは、見方によっては極めてあたりまえのことであろうかと思うわけでございます。しかしながら、本当に友人を得るということがそういう形の中だけで十分であろうかということについて、実は私は疑問を持っておるわけでございます。それをさらにつき進めて行くということになりますと、午前中の三浦先生のお話の中にもございましたけれども、流れの中にその流れを右と左に分ける岩の存在、こういった岩の存在というものをやはり私どもは効果的にそういう存在というものを認める必要があるのではなかろうかというふうに感ずるわけでございます。いろいろその岩の置き方、またはその作り方がございますけれども、これを勤労青少年ホームの中におきますグループ活動というところに視点をあてて、しかも現在の現状の中で実現が可能な方向というものを考えてみますと、例えば一つは、私どものホームに置きましていろいろなグループがございますが、これらのグループ活動をいたします時間的な状況と言いますのは、どこのホームでも同じだと思いますが、大体夜の六時半から八時半ないし九時頃の二時間ないし二時間半という形の中でこれが行われているわけでございますけれども、あるグループ、例えばテニスのグループなんかによりますと、夏休みを利用いたしまして、自分たちでいろいろ合宿などをよそへ出かけてやっております。こういう二泊とか三泊の自分たちの中の合宿、これは単にお互いが友だち同士が物理的に接触する時間が多いというだけでなくして、そこには普段の二時間とか二時間半の間勤労青少年ホームの中では味わえないところの何か心理的精神的な触れ合いというものが、その中に出て来るのではなかろうかというふうに私は前三者の立場から考えておりますが、事実そういうような形が表われておるのが実態でございます。

それからもう一つは、やはりメンバー同士が何等かの形でそういうぬるま湯的なところから少しでも緊張度、極端なことを言えば危機感、われわれがしなければならないのだ、どうしようもならないのだというようなこと。例えば、かつての地域青年団というものは、やはり私は地域におきまして、青年の力、労力というものが極めて重要な資源としてその地域の大人の人たちから頼りにされておったという実態があったのではなかろうかと思います。例えば、現在でこそいろいろ道普請であるとか、あるいは消防の仕事であるとか、

あるいは警察の仕事、こういったことは地方公共団体の仕事としてプロ化しておりますが、昔はこれはやはりその地域の青年がやっておったわけでございます。崖が崩れて道がとだえてしまった。生活の上においてよそへ出かけるということも出来ない、そういう中でこれをなんとかしなければならない。そのなんとかしなければならないということを青年の力に頼っておったということは、青年の側からすればそれが生活に極めて結びついた、極めて重要な、ある意味では極めて緊張感とそこに危機感があったからこそ、その結束というものは極めて強かったのではなかろうか。こういったものをやはり現在のホームの中に入れて行くとするならば、さきほど申し上げましたようなことととか、あるいはこれは暴論になるかもわかりませんけれども、一つの方法としては私はグループのリーダーがあまりにも全てのことをし、全てのことを知っておるということはかえってこの緊張感を消滅させる原因になるのではなかろうかというふうに感じております。つまりリーダーは全てのことが出来、そして全てのことを知っておるということは必要だと思いますが、それと全てのことをしてしまうということとは私は違うと思いますし、それを選り分けるということは理屈の上では可能ではございますが、実際は非常にむずかしいと思います。そういった意味において暴論と申し上げましたのは、むしろ私はリーダーが少しくらい力不足のほうがかえってそのグループのお互いが力を合わせて何かものを処していく、そういう形の中で友情というものがより一層高められて行くのではなかろうかというふうに感ずるわけでございます。これの裏腹の関係といたしましては、そんなリーダーならしょうがないというような考えになる危険もございますけれども、私は何かそういった一つの緊張の種を蒔くといういろいろな方法というものをホームの中で今後行って行くということが、仲良し集団がさらに高められた形、そういう形の中からより一層人間性の豊かな青年が育って行くのではなかろうかというふうに感ずるわけでございまして、それがさらにホームの中でなくして、地域社会への一つの課題というものを、青年自らがそういう一つのステップを踏みながら摑んで行くところに私はかって青年集団が地縁的、血縁的なものから脱地域化という方向へ行きましたけれども、しかしながらやはり地域における課題というものは依然として数多くあるわけでございまして、青年が脱地域化という形の中で育ちながら、なおかつ、それが地域へいかに地域の課題と取り組んで行くかということが、これからの私たちの勤労青少年ホームに課せられた課題であると同時にそれがより一層そういう一つの課題を取り組んで行く中でお互いの友情というものが、仲良し集団の中における友情よりも、さらに高められて行く一つのポイントではなかろうかというふうに私は考えておるわけでございます。以上でございます。

江橋（司会）　どうもありがとうございました。

熊倉先生からは、横浜市という大きな都会ではございますけれども、いろいろ先生方のお話の中に出て来ておりますように、地域社会、あるいはコミュニティーというものが崩壊しつつある中で勤労青少年ホームというものが青少年の友人関係、あるいは仲間意識というものを高めるために、どんな役割を果しているのであろうか。従来のようなただ仲良しグループの域だけでは不十分ではないか、やはり一つ具体的なお話をして下さって、そこから脱出して行く努力というものがやはり必要ではないかということを指摘していただけたものと思うわけでございます。

一とおり先生方のお話を伺ったわけでございますが、やはりまだまだお話し足りない点もあるように私には何えましたので、ひとついまの諸先生方のお話を伺いながら、補足する点がございましたら、それぞれの先生から

補足していただきたいと思います。では岡本先生どうぞ。

岡本（講師）　諸先生方のお話の中に仲良し集団という言葉が出て来ておりますけれども、それに関して若干補足しておきたいと思います。

さきほど私は反抗期と猶予期というようなコントラストを示したわけですけれども、反抗期の場合には反抗するわけですから、友だち付き合いというのもかなり同士的な結合というものを必要とするわけですけれども、社会、大人の社会から猶予を与えられて多少迂闊なことをしても大目に見ているというような感じの場合には、友人関係というのはそういった同士的な結合を必ずしもとらない。むしろなにか生活を楽しむために友人付き合いをするということが支配的になるかと思います。そういう関係で出来上るのがいわゆる仲良し集団ということになるわけですが、そこでの特徴というのは、ある言葉で言えば遊戯、遊びに近い、遊戯的な集団というふうな表現も出来るのではないかと思います。

遊戯的というのは、要するにあるルールを守らなければその中にははいれないということで、ところがそのルールを認めるか認めないかということは、入るか入らないかという問題であって、ルールを認めないものは入らない。入らないものはそのルールを変えて行こうというような気は持たなくて、自分にあったルールを持っている集団にだけはいるというふうな形になるわけです。そういったルールというのは遊びのルールですから、とにかく表面的に承認だけすればそこでうまくやって行ける。別に人生感とか、そういった根本的なところに触れるルールではないわけです。そういうものはよそにおいておいてということを暗黙の中に承認してグループにはいるということですから、そこで全人的な接触というようなこともしなくなるというのが支配的な傾向だというふうに思います。

それではどこかで全人的な接触というのをしなければ生活というのはうまく行かないわけですから、どこかでやっている。それが恐らくいわゆるマイホームということであろうと思います。中年の人たちについて言われるマイホームというのは物理的に家を作るということがかなり大きな関係になっておりますけれども、若い人たちのマイホーム主義というのは、妻、子と非常に親密な小さな世界を作ち出してしまう。そこにはほとんど他人を寄せつけない。それを非常に大事にする。友だちも極く少数の友だちとかなり親密な付き合いをする。しかし、それらは全人的なものというふうには必ずしも行かない。あるいは極く少数の人とは全人的な付き合いをするけれども、非常に多くの友人とうまく上手に付き合って行く。それは遊びをやる。なにかスポーツをやるというようなことと同じふうなやり方で友だち付き合いをしているのではないか。そんなふうな整理が出来るかと思います。

江橋（司会）　ありがとうございました。

それでは矢野先生お願いします。

矢野（講師）　いま私自身気持の中でちょっと混乱が起きているのですが、混乱といいますのは、いま岡本先生がお話しになったような、いわば反抗の時でなくて、むしろそれを猶予と見たほうがいい。まさにそういう現象で私どもの職場にいます若い人たちの現象も非常にスムーズに理解出来るのです。ではそこでどうしたらいいのかという感じがするのです。そのままにしておいて次代を背負ってくれる若い連中が育つのか。ただ猶予のままの状況においておいていいのだろうかというようなこと。事実は事実で、しょうがないではないかという気もあるのですが、ではどうしたらいいのだというところで、いろいろ混乱してしまうということが正直のところです。

特にいま私がいますのは研究所にいるわけなのですが、要するに若い連中に、わが職場

においてわが企業において若い連中に何を期待するのかということをもう一度明確にして行かなければいけないのだろうという気がします。特に今回あがっています勤労青少年というのは主として学歴の意味では高校卒の人たちなので、彼らが中心なのだろうと思いますが、その人たちに結局いま何を期待しようとしているのかということなので、かってのようにそういう若い人たちに一〇年前あるいは二〇年前ですと、まさに彼らが職場を背負って行かなければいけなかったわけですが、私ども研究所においては彼らはやっぱり縁の下の力持ちだろうと思うのです。中心的な役割を果すのはやはり大学卒のマスターなりドクターなりが中心になって行くのだろうと思います。もちろん勤労青少年、その人たちがいなければそれ自身も達成はし得ないのですけれども、あくまで主役はやっぱり違うだろうというのが現実なのだろうと思うのです。なんやかんや言っても。では彼らに誇りを持たせる、誇りを持たせるということが目的なのではなくて、彼らは本当に何を期待するのかということを明確にしない限り彼らをハッスルさせたり彼らを本当の意味で成長させたりという施策が出来ないのかなとそんなことをいま感じ始め迷い始めているということです。

江橋（司会）　どうもありがとうございました。では野原先生お願いいたします。

野原（講師）　いま矢野先生もおっしゃいましたけれども、ともかく時代が変っておりまして、さまざまな新しいことが出て来て新しい価値観というものが出て来ているわけですが、一つだけ、いまはお手本がない時代という気がいたします。「こう生きたら一番よろしい、みんなそう生きた、少数の人は別の生き方をするだろうけれども、これが一番いいのだ」ということが、ちょっと動かされて来て、多様化と言いましょうか、過渡期と言いましょうか、そういう時代にあって、若い人はおやじと同じ生き方でどうなのだろうか。お父さんのほうも「お前とう生きろよ」と責任もって言えるのか。子供の時代は違っている。そういう時代にあって、私が感じますのはやはりいまの若い人は、批判もいろいろありますけれども、最終的に自分で決めるということがかなり出来る。そして何か方法も見つける。ただじっと我慢するのではなくて何か方法もみつける。その辺に私どもの仕事はそういうことを目指してやっておりますが、自分で決めたことは案外やる。その辺いまの個人的な、個人主義というか、そういう時代の反映と言いましょうか、会社のためより個人のためというような考え方があります。一つの例ですがある地域で大変な不況の時に会社一〇〇名が三〇名になった。行ってみましたらやめないで若い人が頑張っている。なぜかなという思い方をしては企業に申し訳けないけれども、九州のいなかから出て来た。自分でこれは決めてしまったのだ。親は「あんな所まで九州から出て行くことはないじゃないか」と言ったけれども、これは自分で決めてこんな所まで出て来た。だから耐えるし、なんか方法も考えるというような例が非常に多いわけなのです。そういう意味で、一つは私どもはいろいろ手取り足取りちょっとやりすぎたと言いましょうか。ただしさきほどの矢野先生がおっしゃった最後の体験の場を持たせるということは私は手取り足取りではない、チャンスを与えるという意味で非常に素晴しいなと思っておりますが、それをあまりやりすぎて全部めんどうみすぎて、彼らは一杯飲みに行くのですら後で飲んだから「ちょっと言うこと聞けよ」なんて言われるのではないかというようなむしろ不信感、自分がいつまでも一人前になれないというようなそういったことも感じておりますし、こういう言い方をすると年輩層の方からおしかりいただくかもしれないのですが、いまの若い人たちが言いたいことを言う、その態度が憎い。憎いと言っては大変失礼なのですが、態度がい

やだという方がまだまだ多い。その内容、言いたいことを言う内容が悪い。どうも「小筋は通っているけれども、あんた大筋は通っていないよ。こうだよ」と、それをピシッと言ってあげる。これなら若い人は受け付ける。その言いたいことを言う態度がまず気に入らないと言う。そういったこと一言言うと一言返って来る。これではもう言う気がしない。一言づつ何か意見と言いましょうか、方法を早く言われてしまったらもうどうしょうもないのですね。「こうやれば一番いいよ。」いろいろその前にこうしたいこともあるし、そこをストップされてしまう。いちいち返って来てしまう。そういういろいろな不満があって相談もしたいしいろいろなこういうことは同じレベルでは無理なのだ、もっと指導が欲しいのだという時に上に出ない。言いたいことを言うそれは習慣化して学校でもそれはよろしいと言って教育されておりますし、見合いコンサルタントのお集りがあったならば、いま結婚で一番もてるのは話のうまい人だというのですね、男女ともに。そういう時代の背景がございまして、司会がうまかったり、歌がうまかったり、話がうまいと学校ではリーダーになったり、キャプテンになったり、一概に言ったらおこられるのですが、そういう感じでございますから、そういう習慣化した人たちにその内容を直してやるというか、「これは通らないのだよ」と直してやる。それならよろしいという気がしますが、最後は自分で決めさせる。決めさせられないものもあるのですけれども、これはやってもらわなければ困るというものもあるのですけれども、決められる余地のあるものは決めてもらう。そういったことが何かお手本がない時代だけにそういう人間、自分で決められる人間にして行くことが私たちの若い人に対する育成のポイントではないか。一人で歩ける人間ということを切に願っているわけです。

それからもう一つは、例えばある時一五才の女の子たちを連れてハイキングに行きました。そうしましたらみんなワーワーとお昼休みに遊びましたら山が見えたので一人の女の子が「ねえ、ここから新潟はどっちかな。」新潟から出て来て寮に　るお嬢さんですが、友だちに言った。そしたら「あっちじゃないの」とめんどくさそうに一人は答えた。また聞いている「新潟どっちかな。」「うるさいわね」なんて言われている。「いいじゃないどっちだって」と言われている。次に笑って私見ていたので顔が合って、とことこっとそばへ来て、「ねえ、野原さん、新潟どっちかな。」これは新潟がどっちかこっちかと聞いていないのですね。それを非常に正しくこうだよと言ったってずれております、彼女は際限もなく聞きたいでしょう。それは寂しくなった、思い出してしまった、ホームシックになった。それをそういったことはみっともなくて言えないし、みんな寂しい子たちだから、そんなこと言ったらぶんなぐられますよね。「思い出した、寂しいわ」なんて言ったら、そういう子たちばっかりですから。そこで言えないから「新潟はどっちかな」と聞いて、「どうしたの」という答えでもいいし、これは、「思い出した」でもいいし、「ちょっとここにしばらくいたら」でもいいし、こういうのも私どもは全部カウンセリングだと思っているのですけれども。少しそばにいて何か言うのかなと思ったら言わないでそのうちに遊びに行ってしまった。これでもいい。

そういう意味で、さっき私がもう少し言いたかった裏の気持、探ぐるのではなくて、雑談や大して必要でないような話、表面的な話では、本当のところにははいれない。雑談のレベルでキャッチボールみたいに話し合っていてもずれる。「新潟あっちの方よ」と言ってもずれるから、もう少し何をそこにどんな気持でそれが言われているか、本音をキャッチすると言いましょうか、そんなふうにもう一歩若い人にはいっていける余地が、まだあ

るのではないか。それを拒否するかどうかはまた別としましても、私の見て来た範囲ではもっと上の人に相談したい、話したい。友だち関係のとは別の意味の人間関係を持ちたいと思っているようです。そうしますとさらに友だちとはまた違う意味の発展性も出て来るわけですね。いまそこでは憩いの場であったり、そこだけが頼りで、そこを切られたら生きていけないみたいな、そういうふうになっていることがいろいろな問題もあるし、またさきほど言ったように友だちにまで不信感をやや持っていて、本当のところは言えないという人もふえております。案外雑談して帰って来るという人もふえておりますが、人間全般になんかちょっと不信感というものも感じられるのでちょっと申し上げたかったわけでございます。

江橋（司会）　どうもありがとうございました。それでは熊倉先生お願いいたします。

熊倉（講師）　特別ございません。先生方のおっしゃったように青年自身が主体的と言いますか、私は主体者として活動して行く、そういった場としてはやはり職場には職場なりのご努力がされていると思いますが、おのずから一つの制約が当然あると思います。そういった意味で勤労青少年ホームという場所におきましては、そういったことは、青年の立場に立ちますと極みて自由に出来る所だと私は思いますので、さきほど来の先生方のいろいろな主体者としていかに青年が活動して行くか、こういったことをこれからのホームの中に少しでも取り入れて行きたいというふうに考えております。

江橋（司会）　どうもありがとうございました。

講師の先生方のお話が一とおり終ったわけでございます。さきほど申しましたように直ぐ質疑たり、あるいはある課題についての討論なり、あるいはご意見なりということでみなさん方のほうは続けろとおっしゃるかもしれませんけれども、やはり若干生理的限界にも近いのではないかと思いますし、その限界に挑戦するのがきょうは大事かと思いますけれども（笑）、司会者の勝手を言わさしていただきまして、これから少し休憩して三時一〇分前にまたお集りいただきまして後半のご討論を是非みなさま方の活発なご意見によって盛り立てていただきたいと思います。

ではこれで一五分間休憩いたします。どうもありがとうございました。

（休　憩）

江橋（司会）　それでは後半の質疑応答及び討論に移りたいと思いますが、書いて出していただければ大変よかったのですけれどもあまりたくさんございませんので、ちょっと残念でございますが、別に書かれなかったから後はもう質問に答えないというようなことは全然ございませんので、お書きにならない方は是非このお書きになった方に対しての解答が済んだ後でひとつまた自由にいろいろご質問なりご意見なりを出していただければ大変幸いに存じます。

では初めにこの書いて提出して下さった質問に対して先生方にお答えをしていただくということで、最初のご質問の方どうぞ。

大里（十和田商工会）　岡本先生と矢野先生にお伺いしたいのですが、高校卒と大学卒との差についてもう少しお話しいただきたいのですが。

江橋（司会）　それでは岡本先生お願いいたします。

岡本（講師）　高校卒と大卒との違いということでございますけれども、一番大きな差異というのはやはり職場での差異ということだと思います。家庭とか、あるいは地域社会というのはさきほどの話のようにほとんど機能していないわけですが、そういった面では大卒であっても高卒であってもそれほど大き

な違いはないと思いますが、職場での差異ということになろうかと思います。

職場でさきほど高学歴化が進んで来ているというふうに話しましたけれども、矢野先生のお話にあったように高卒はどうしても縁の下の力持ち的な脇役になりがちであって、主役のほうは大卒になるという傾向が強まっている。あるいはもっと強まって、例え大卒であっても極く一部の大卒しか主役にはなれない。大部分の大卒は高卒と同じように脇役になるというふうな傾向が職場では出て来ていると思います。

そうしますと、それがどう影響するか。余暇活動、あるいは友人活動、友人関係ですね、そういったものにどう影響するかということになりますが、友人関係についてどういうことを求めるかということで、職場、その仕事が主役的なものであるか脇役的なものであるかの影響で違って来ると思います。一般に仕事と余暇、あるいは仕事や職場とそれ以外の面での活動ということに関しては、職場で活躍出来ないからそれ以外での場で活躍することを求めるというふうに考えるか、あるいは逆に職場で活躍出来る人はそれ以外の生活場面でもよく活躍している。しかし職場であんまり活躍していない人は、それ以外の面でもあまり活躍していないというふうに考える立場。二つあるわけですが、実際にはこれはどちらが真実というわけではなくて、どちらのケースも見られると思います。

ただ一般的な話をすれば、大卒のほうは能力を発揮するとかという場面が職場である程度は、大卒でも極く一部の者になって来ていますけれども、ある程度は与えられる。ところが高卒のほうでは、職場ではそういった場面がかなり少いということがありますので、それが友人関係に影響を及ぼしているのではないか。むしろそれを職場での活躍出来ないことを補償する、その穴埋めをするという形で高卒の場合には友人関係を結ぶ。そういうことでありますと、友人関係を結ぶ契機と言いますか、その活動の中身、そういったものが必ずしも積極的、プラスなものでないということもある。例えばさきほどから何度も暴走族の話が出て来ますけれども、暴走族は高学歴者には極めて少いわけですが、中卒とか、あるいは高卒。どちらかと言えば職場からはみ出した形というのが多い。それが他の場面での触れ合いを求めてああいう形をとっているというふうに解釈されているわけです。そういう恐れが高卒の場合には若干ある。大卒の場合には比較的そういうことは少いのではないか。むしろ仕事がかなり忙しいとかということで職場以外での友人を求めることは求めてもなかなか出来ない。あるいは逆に仕事上の付き合いをそのまま友人関係に転化するというふうな傾向があるかと思います。

矢野（講師）　企業の中で大卒と高校卒がどう違うかということになりますと、同じ企業でもセールス関係とあるいはスタッフ関係、あるいは工場。私がおります研究所と、全部それぞれ違うような気がいたします。

セールス関係なんかになりますと大卒であろうが高卒であろうが一人のセールスとしてのスキルが大変問題になって来ますし、セールスとしての気力というのでしょうか、あるいは感受性と言いますか、そういった面が大分個人個人の力の問題になってまいりまして、学歴はそう問題にすることにならないと思います。工場なんかの場合も集団を扱うということがありまして、集団を扱う、集団のチーム作りをやって行くというヒューマンスキルの領域になって来ますと必ずしも東大卒がうまいとは限らない。むしろ専門バカ的なところがありまして、高校の連中のほうが余程力があって、力があるということはまた逆に自信にも繋がるし、そこからますます逞しく育っている人間も大いにあると思うのです。

ところが研究部門、技術部門になってまいりますと、まさに主役は大学卒であるわけです。と言いますのは、研究課題を遂行して行

くという面も当然なのですが、それを中心にして職場というものが生まれておりますから、そういう意味での技術能力、問題解決能力がなければチーム化の面は彼らがやるのだと言ってもそう力を揮える領域は少くなってまいります。しかしあえて言えばやはりそういうチームを作る、職場のマネージメントをやって行く。そういったところで彼らの働く、彼らがやっと劣等感を取りもどし誇りを持つ発揮の場がそこにあるであろうという気がします。それもやはり限界があります。となって来るとまた別の質問の中にあったかと思うのですが、労使関係のほうで主体の役割を果して行く。私どもの会社の中では組合活動の中心的な役割はむしろ高校卒で、むしろなぜ大学卒がそっちへはいらないのであろうかという感じすら持っているような状況です。

つまりいまのご質問は高校卒と大学卒の差をあれこれあげてもしょうがないのですが、ポイントはきょうのテーマと友人関係との繋りで言うと、こんなことではないでしょうか。

江橋（司会）　よろしいでしょうか、ご質問なさった方。あるいはもう少しこういう点を答えて欲しいということであれば、ご質問を補足して下さってもいいのですが。

大里（十和田商工会）　質問の大里ですが、ただいまのお話でも結構ですが、もう少し大学生と高校生が同じ職場におりながら、どのような友人関係を結んでいるかということを一番聞きたかったわけなのですが。

矢野（講師）　大卒と高卒とがどういう友人関係を結んでいるかということですか。

これこそ職場によって千差万別だと思うのですが、うまく行っている場合は、大卒がちゃんと高校卒を非常に指導して、技術的な力の面でもうんと教わって行くというような関係になっているのだろうと思うのです。ただしその傾向はここ数年、こと五年くらいですかね、ますますその関係は薄くなって来たような気がしますね。大卒は大卒で自分の領域で精一杯というような状況で、高校卒を放っておくというような状況です。また逆の言い方をしますと、高校卒のほうからも大学卒から何かを学びとってやろう、そしておれもなんとか伸びていこう、というような関係が四、五年前に比べて数段薄れて来ているような気がします。

私どもでもどこの会社でも同じことなのですが、やはり資格昇進試験というのがありまして、大学卒と同じ扱いになれる試験をパスすればよい、そういうような対応制度があるわけですが、その制度が機能したのは五年前までだろうという気がします。というのは、その上昇要求というものをそれによって釣って、試験になんとか引きつけて、それとの関りにおいて大学卒が高校卒を育て、高校卒も上から何かを学ぶというような、そういうような関係が展開したのは五年前ぐらいまでで、このところ全然だめだという感じがいたします。一方指導する側も指導しないし、指導を受けようという側もないし、いうなればお互に技術をみがいて、あるいは知識をみがいて、そういうことを中心にして友人関係が保たれていたものが変って来て、単なる遊びの仲間。遊びの仲間とでは、これは上下の格差もなしに遊んでいるような状況ですね。学び合う関係としての友人関係から遊びの関係になって来ているというように私自身は感ずるのですが、そういうところでよろしゅうございますか。

江橋（司会）　よろしゅうございますか。

大里（十和田商工会）　はい。

岡本（講師）　もう少し補足させていただきますと、大卒と高卒、あるいは中卒というふうに学歴に差がある場合の職場での付き合いというものですが、先進国、ヨーロッパなどの例をとってみますと、多くの場合最初からお互い同士自分たちとは違うのだ。大卒は大卒、高卒は高卒、あるいは中卒は中卒ということで、最初からむしろ自分たちから接触を断っているという傾向が強い。ところが日

本の場合にはこれまでですと同じ職場だからということで職場以外での活動、活躍というのも一緒にするし、昼の食事なども一緒にする。ところがヨーロッパなどの例で見ますと、昼の食堂も別というふうな感じのところが多いわけです。最近多少そういった傾向に近づいて、そういう傾向が若干現われて来ているのではないか。お互い同士は違う層だからということを意識して、積極的には付き合わない。仕事上だけの接触にとどめるという感じが若干日本でも現われて来ているのではないかというような印象を私は持っております。

江橋（司会）　大里さんよろしゅうございますか。それではその次の質問に移らしていただきます。どうぞ。

推津（神奈川県川崎北労政事務所）　岡本先生、矢野先生、それから他の先生でも結構ですが、お答えいただければ幸いです。

やや問題は広いのですが、勤労青少年福祉法により設置された勤労青少年福祉推進者が、実際にはあまり意義のある存在となっていないように感じられます。そこで一つ目として、この制度をどのように考えられますか。それから二つ目として、推進者の存在を意義あるものとするには具体的にどのようにしたらいいのでしょうか。この二点についてお伺いいたしたいと思います。

江橋（司会）　よろしいでしょうか、では岡本先生から。

岡本（講師）　私は、研究所におりまして、勤労青少年福祉推進者というのが具体的にどういうお仕事をなさっているか、あまり詳らかにしませんけれども、職場での若年者の福祉を責任を持って推進するという担当ということだと思いますが、福祉というものをどんな内容のものだというふうに考えるかということで大分その存在意義というようなものも異って来ると思います。

これまでの福祉施設というふうな呼ばれ方で意味するところの福祉は主として余暇活動であるとか、あるいは厚生ということで病気になった時にどうするとか、そういった面だったわけですが、そういった面での推進者ということですと、最近の若者の余暇活動を職場と切り離すという傾向とぶつかることになるわけですね。企業を舞台にして余暇活動を行う。それによって勤労青少年の福祉を推進して行こうという推進者の考え方。もし推進者の考え方がそういうことであれば、若者たちが余暇活動は職場とは別な所でやろうというふうに考えていることとぶつかって、多少そこにうまく行かない面が生まれるということがあろうかと思います。たださきほど横浜市の勤労青少年ホームの館長さんのお話にもありましたように、実際には職場と住居が離れていたり、あるいは移動が激しいというようなことで、なかなかその地域での余暇活動といったものは推進しにくいので、実際には企業を舞台にした余暇活動というのはかなり多いと思いますが、受けるほうと言いますか、若者たちの間では必ずしもそれが望ましいものだとは思っていない。仕方がないから企業の中、企業を舞台にしても我慢しているというような面が若干あるのではないかと思います。

勤労青少年の福祉ということをもう少し総合的に考えますと、必ずしも余暇だけではなくて、仕事を含めた生活全般で福祉を増進するということですから、企業としてはやはり第一には仕事を通しての福祉、仕事と切り離した余暇ではなくて仕事を通しての福祉ということがまず第一義的には考えられるべきではないかというふうに考えております。

矢野（講師）　実は大変恥かしいのですが、推進者の制度について私はそれほど詳しくないのです。申し訳ないのですが、いろいろとお話を聞いていると、多分私どもの会社ではああの人たちがやっているあの仕事だなと見当をつけるようなわけなのです。

青少年の問題で言いますと、私どもは一年間の教育期間を設けて、研修センターという

所がありまして、そこへ一年間ガッチリ勉強する場になっているわけなのですが、そこの辺の教育担当などもその役割を担っているのだろうと思いますが、「なんで教育だけしないで、遊ばせたりするのか」という意見もあったようですが、こういう役割を与えられたからだったのでしょう。

法律での福祉の定義はどうなっているか私はわかりませんが、私自身福祉ということを考えた場合に、特に青少年の福祉ということからは、三つのポイントがあると思っているのです。一つはやはり夢を持っている、目標を持っている。それぞれの青少年が目標を持って、夢を持って自分たちの生活を送って行くということ。二つ目は自分なりの個性なり、あるいは自分なりの技量なりというものをみがいて行く、あるいはそういう意味での自分の向上を図って行く。向上意欲みたいなもの。三つ目は、仲間と一緒にやって行くという全体の和である。その三つの面で捉えて行くと、そういう福祉担当者が私どもは是非必要だと思っています。

職場にいるとややもすると仕事中心、生産中心になって行って、そこから除け者になって行く人たちがいる。その人たちに本当に相談相手になって、いま言った三つの点でさらに意欲を持ってやって行く、そういうスタッフロールというのはあるはずだという感じはします。彼らはどこかで悩みを打ち明けたいし、しかしいろいろなデータを見るとそういう人事相談係には相談に行きたくないということなので、その辺が困ってしまうわけなのですが、ただし、私どもの研修センターの担当連中は大丈夫だという感じは私は持っています。一年間の合宿をやっている間に生活も共にしますし、いろいろと関係を持っていますので、卒業した後もいろいろなグループ化を図っては彼らと接触を保っておりますので、その辺はある程度うまくいっているのではないかという気が私はいたします。

問題は、存在意義があるような方向にどう持って行くかということだろうと思うのですが、いろいろな努力があるような気がしますね。問題は彼らと一緒に生活し、彼らと一緒に問題を悩むということであろうと思います。決してそれが過保護にならないように、なんか悩んだような時にはちょっと話しに来れるような関係を作るというのは、正にそのスタッフのその人の資質次第だと思うのです。そういう資質のある人をどう探すかというのが、私どもの人事担当の一方での大きな役割だろうと思うのですがね。答えになるでしょうか。

ついでに外の方の希望なのですけれども、原点に帰ると、職場の長は職場の長としての役割があるし、スタッフはスタッフの役割というのがある。そしてまたもう一つ外の、例えばここにいらっしゃる先生方、コンサルティング、あるいはカウンセラーをしていらっしゃる方々の役割というのがある。一番いま考えなくてはいけないのは、ラインの長と職場の長と、そういう福祉担当者、福祉推進者と言われるスタッフと、そしてその外部のそういうようなカウンセリングなりコンサルティングをしていらっしゃるそういう人たちが、どういうコンビネィションを組んで、どういうチームでやって行くかということがあるだろうと思います。それもどう進めて行くかという観点は何を福祉と考えるかということから出発しなければいけませんし、本当の意味で青少年を育てるためにはどうしたらいいのかという原点から考えなければいけないと思いますが、私はいま問題として感じますのは、三者のチームワークはどう持って行くかということのほうにむしろ大きな関心がある。そういったことです。

江橋（司会）　どうもありがとうございました。野原先生いかがですか、ご意見は。

野原（講師）　ことには埼玉県の方もおいでかもしれませんが、埼玉では福祉推進者の会というのが各労政事務所で一連の講座が終りました後、地元の方々の誰かが役員さんに

なって三〇名とか四〇名とか、ある地域では大変大勢でございすしたが、集って例会を持っていらっしゃるわけなのです。他の県でもおやりになっていらっしゃるかと思いますが。そこへ時々お伺いするのですけれども、いろいろな事例を出し合って、「いま、うちはこういうのが出て来たけれども、どうしょうか」とか、そういったことで、そこへ出ますと私は大変勉強になって、なるほどそういう捉え方があったか、そういう処理の仕方が一番お互いにとっていいのではないかなというようなことが出て来たりして、そこには大変和気あいあいとした会を持っていらっしゃるようなのです。

そういうことで福祉推進者といいますと、いま矢野先生も岡本先生もおっしゃいましたようなやはり悩みを聞いたり、それから仕事を通しての辛いことやいろいろなことを少しずつ楽な方向に持って行くという役割があります。若い人達はいまともかく楽に仕事したい、なるべく楽がしたいということを言っておりますから、では楽というのはどういうふうなことなのかということで話し合ったりすること。または観察、よく推進者の方は「自分は観察者だ。」とおっしゃるのですけれども、なんかの渦中にある人というのは気ずかないし、アルコール中毒だとその中毒の真最中というのは全然気付かない。自分から「困ったものだ」なんて言って来ない。気付かせる役と言いましょうか、そういうのも果しているとか、いろいろな例がございます。交通整理役または、早期発見と言いましょうか、いろいろな問題が早期発見出来ないので法律問題になってしまったりする例があります。弁護士さんがよくおっしゃるのですね、法律問題になってしまった時には相当きつい。相当深くなっている。そういうことをよく言われますが、こうなる前の時点の発見者みたいなことで職場内でのカウンセラー的な意識をお持ちになってやっていらっしゃる例が多いので、大変私どもも社外のカウンセラーとして勉強になっております。そんなことでございます。

江橋（司会）　熊倉先生なにかございますか。

熊倉（講師）　福祉推進者とそれから勤労青少年というものを勤労青少年ホームの職員とそこを利用する勤労青少年というふうに置き換えて考えてみました場合に、端的に言えば行政がいかにそういう勤労青少年が主体的に活動出来るために関りあって行くかということになろうかと思うのですが、当初、私はそういう場合に勤労青少年が主体的に活動出来るように、その諸条件を整備することが行政の役割だという考えでストレートにそれを持っていったわけですが、どうしてもやはりそういう考え方で持って行きますと溝が出来てしまう。そこで現在はみなさん方の所と全く同じでございますが、勤労青少年と一緒にさきほど先生のお話がございましたように行動し、そして考えるということ、これが一番勤労青少年ホームの職員と勤労青少年との関り合いの中では一番手取り早いし、一番効果のあることではないかと思います。そういう形の中から一体職員は何をしていったらよいか。いま一番ここで大事なのは何をして行ったらいいのかということがお互いに確認出来るのではないか。こんなふうに考えております。

江橋（司会）　どうもありがとうございました。ご質問なさった方、よろしゅうございましょうか。

推津（神奈川県川崎北労政事務所）　きょうのテーマとちょっと異った質問かと思いましたのですけれども、特に岡本先生と矢野先生のお話の中に、縦の関係が非常に薄れているというお話がございましたものですから、推進者というのは若い人との関係でやはり縦の関係になろうかと思います。そこで特に岡本先生と矢野先生にお尋ねしたわけなのでございまして、ちょっとテーマとはずれてまし

た点はお詫びしたいと思います。

そこでむしろこの質問はきょうご出席の先生方よりもむしろ労働省の担当の方なんかにお尋ねすべき問題だったかもしれないのですが、諸々の関係でもし関与していらっしゃればと思ったものですからお尋ねした次第で、特に矢野先生の場合、職場の代表ということでいらっしゃったので、よくご存知ならば教えていただきたいと思ったわけです。

いまご解答いただいたことはよくわかるのでございますが、私実際にこの仕事に少し関与しておりまして感じるところは、いま矢野先生がおっしゃったように、大企業におきましては何もこういう制度をあえて設けて、勤労青少年福祉推進者はあなたですということを指示いたしませんでも、既におやりになっていらっしゃるわけです。その効果がどうであるかということはよくわからないわけですが、今度これを中小の企業に持って来てみますと、かなり行政サイドでもってこの必要性を認め、またこれ行政サイドからでなくとも、一般的に考えて、勤労青少年を健全育成しなければならないという抽象論はどなたも否定はなさらないと思うのです。ただ否定はしないけれども、具体的にではどうしたらいいのかということになりますと、大企業ではさっき申し上げましたようにあえてこういう名称がなくても既におやりになっている。中小企業におきましては、なかなかこういうことまでやる余裕がないというのが実態でございます。

そういうことを現場と関わるわれわれといたしましては、つぶさに見て知っているものですから、せっかくこうして作られた制度が有名無実になるということを非常に残念に思いますし、もし有名無実でこの現状をどうにも動かさないものであるのなら、そういう前提をはっきり踏まえた上で、こういう制度を仮りにも法というものの中に推進者を置くような努力をしなさいというふうに謳っているものですから、もし出来ることならなんらかの方向転換を図っていただいたらというふうな気持があったものでご質問した次第です。矢野先生のおっしゃったことをどう生かすかということは、推進者をどう選ぶか、その人選にあるというふうなお話がございましたけれども、この点が非常にむずかしいことだとは思いますが、非常に貴重なご意見としてありがたく聞かせていただきました。どうもありがとうございました。

江橋（司会）　直接労働省の方に答えていただきたいということもあるかもしれませんけれども、きょうは先生方お四たりでございますので、いまの点についてはまた別の機会にお願いするということで、ではいまのご質問についてはこの辺で打ち切らせていただきたいと思います。

それから他に私自身に質問がございましたが、私は司会者でございまして、どうもきょうのこの場でお答えするのもどうかと思いますので、後ほどこの会が終りましたら喜んでお話をさせていただきたいと思いますので、この質問は割愛させていただきます。

そこで書かれた質問は以上でございますが、どうかまだ時間もございますし、みなさま方ここでせっかくおいでになって、やはり是非こういう問題についてはこの先生にこの機会に是非伺いたいとか、あるいはさっきいろいろお話し下さった点で、この点でもう少し明らかにして欲しいとか、あるいは先生方がおっしゃったお話の中から「むしろわれわれはこういうふうに考えるのだけれどもどうであろうか。」というようなことがございましたら、ひとつ遠慮なくご発言をお願いいたしたいと思うわけでございます。こちらのほうで記録をとっておりますので、ご発言の際は所属とお名前だけをおっしゃって、それから何々先生にお願いしたいということで、ご質問なりご意見なりをお願いいたしたいと思います。

どうぞ。

時間が十分にございますので、どうぞ。それから本当に勤労青少年と友情というのはなんか掴まえられるようで掴まえにくい本当にふわふわ浮いて漂ってどこかへ行ってしまうような話題でございまして、ちょっと掴みにくいというふうにお考えになるかもしれませんけれども、みなさま方実際に、本当に具体的に勤労青少年と日々接しておられるのではないかと思いますので、どうぞこの機会でございますので、ご発言をお願いいたしたいと思います。

渡辺（日産プリンス㈱） 勤労青少年と友情ということで、特に友情ということになりますと、人との関りとか、人間関係というのですか、非常に基本的な問題になって来ると思うわけです。野原先生はご自分のご意見を体験を踏まえておっしゃっていただけたのですが、岡本先生と矢野先生と朝倉先生、それから野原先生にもその辺のことについて、よろしければ統計とか外国のこととか他人のことというそれではなくて、ご自分のご経験、ご意見を聞かせていただけたらと思います。

江橋（司会） それではお願いいたします。

岡本（講師） では私から。私はこの会の役割としては抽象的な話をということで、抽象的な話をしましたけれども、私自身の考えていること、あるいは感じていることと言いますと、さきほど述べました友人というのはどういうものであるべきかというふうな自分の価値観を述べる、あるいはそれに照して現在の社会をどう考えるかということになろうかと思いますが、友人関係というようなものは、非常に個人的な問題ですので、友人関係そのものに関しては行政であるとか、あるいは企業であるとかといったようなものはそれほど立ち入らないほうがむしろ望ましいのではないか。それぞれの個人個人の問題として任せておくというと変ですけれども、そこにはあまり立ち入らない。むしろそういった活動が出来るような場だけを用意するというほうが望ましいのではないかというふうに考えているのです。もし問題がある場合にはカウンセリングとかそういった制度を完備しておきまして、そこへ問題がいつでも持ち出せるようにしておくと、そういう装置は整えておくにしても、友人関係とかそういった活動にあまり深く関与するということは、行政とかあるいは企業としてはあまり望ましいことではないというふうに考えているのです。

ただしかし、大人と青少年という両者の関係を考えますと、いや大人は青少年を放っておいていいのかというと、それは必ずしもそうではない。さきほどから青年団の崩壊みたいなことが話されましたけれども、青年団があった時には、その青年団は青年の集りですけれども、青年だけで集って、それで全部その集団の活動が完結していたわけではなくて、その他に村とか町内の大人の会合のグループがあって、それとの関係において成り立っていたわけですね。ところが現在の青年集団というのは若者たちで作っていることはもちろんですけれども、大人との接触というのがほとんど断ち切られているという点に問題があるのではないか。職場では大人と接触するのであって、福祉推進者ということであってもやはり職場の人という感じは否定出来ない。あるいは家庭では大人と接触しますけれども、それは親であるということであって、親とか職場の上司以外の大人と接触する場というのがほとんどなくなっているということが、私は一つの問題ではないかと思っています。その点に関して、例えば勤労青少年ホームなどの所での活動に、メンバーとしてではないにしても、なんらかの形で一般の大人が関与出来るような、相談役とかコーチ役とか、そういうようなことで、監督というようなことではなくて関与出来ればそういう形での関与の仕方が最も望ましいのではないかというふうに考えております。これは私個人の考えであっ

て、別に専門的知識を生かしてということではありませんので別にみなさまにご教授するということではありませんけれども、私自身の考えをということでございましたのであえてお答えいたしました。

矢野（講師）　私のそういう若い人たちとの接する場面は大きく分けて四つあるのです。一つはいわゆる研修スタッフとしてグループカウンセリング的な、あるいはグループ的な動きをやっている場合、あるいは洋上研修に一緒に行って若い連中と、富士フィルムだけではありません、いろいろな連中と接するわけですが、そういう場面での彼らとの関わりの場面。もう一つは一つのスタッフにおりますので、職場のラインの長からいろいろと相談を受けます。大体相談を受ける時は問題児と称されている連中です。三つ目はポコッと彼らが私のところにやって来て、「ちょっと話を聞いてくれませんか」と相談に来る、いうなれば個人的なカウンセラー的な動き。四つ目は、さきほど申し上げましたけれども、彼らをもっと生き生きとさして行きたい、その上では、セミフォーマルな小集団活動ということを大事にして行きたいわけで、例えばレクリェーションであるとか、あるいは現場の問題解決活動とか、そういう運動など諸施策を展開しているわけですが、そういうリーダークラスと接するという四つの場面があるわけなのです。

まず研修とか洋上研修なんかで感じることは、彼らもすごいエネルギーというものがあるのだ。しなやかな感受性というものがあるし、正に仲間を求めあって一緒に何かをやった時のエネルギーの強さというのは常に感じます。

しかし一方で私の中になんかこう空虚なものがあるのです。それはその場においては非常に私は感激し、「ああよかった」と思いますし、彼らも「よかった」と言ってくれるのですが、それでは日常の生活場面で、あるいは日常の職場の場面で彼らがそう生き生きしているかというと、そうでもないのですね。ただ一時的なそういう場面だけ、一つの一過性の感激場面のような感じがしてしまって。

二番目の、いわゆる問題児を扱った時に感ずることは、問題児、問題児と言われているけれども、随分寂しい思いをしているのだなあということは何回も感ずるのです。話し合っている中に、話を聞いているだけで解決することも何回かあるのですが、しかし、それも遅しく本当に一人前になって自分で立って歩き出したなぁという感じになかなかならない。問題児と言っても随分弱いのだなという感じをしばしば持つのですが、例えば大変逞しく動き廻っている組合活動家というのがいるわけですが、その組合活動家が一度私のところへ話に来た。聞いてみるとたわいないのです。その組合活動家といいますのは、全体の選挙をやりますと一番の投票数を獲得するやつなのですが、一度私に会いたいなんてやって来る。そして一緒に話を聞いてみると、みんなからたわいのないことで批判されて爪弾きされているというような、非常に寂しいような感じがあるのです。誰とでもいろいろな活動をやってリーダーシップをやって行くだけに孤独になって行くのだなという感じは一方でしながらも、本当にもう一本芯を持って欲しいという感じを非常に持つ。そういうような動きをしていることですね。

ただ一言、そういうような体験の中から感じますことは、彼らは彼らなりに大変なエネルギーを一方で持っている。そしてしなやかな感受性を持っているということをなんとしてもみなさん方に伝えたい感じがしますし、みなさん方もお感じになっているのだろうと思いますが、かと言って一方で本当に個としての強さが本当にあるのであろうかというと、いまこそ鍛えなければいけないのではないかという感じを一方で持つ。あれやこれや感じながらも私は彼らを本当に援助出来ているのかどうかということでは、本当の意味でまだ

そういう仕事をしながらそういうことをやりながら私の充実感は一方ではあるのですけれども、いま一歩もっとなんかあるのではないかという感じがしてしまっているというのが私自身のいまの感じでございます。

江橋（司会）　熊倉先生。

熊倉（講師）　あのちょっと、ご質問の要旨なのですけれども、さきほどのお話は例えばぼく自身の友だちとは一体どういう関係にあるのかという、その体験を聞きたいと、そういうご質問でございますか。

渡辺（日産プリンス㈱）　今回のテーマなのですけれどもね、大きなテーマは「勤労青少年と友情」ということで、メインテーマですか、いろいろお話しいただいたのですが、いずれにしても自分自身が一つの理想というのですか、期待があってお仕事を熊倉先生の場合もなさっているのではないかと思うわけです。ある程度先生はおっしゃっていましたけれども、先生自身が一体どのように育てたいのかとか、特に人間関係の問題ですね、そういったものについてどういうふうにして育てたいのか。ちょっと先生の話になると話が横道になるかもしれませんけれども、さっき岡本先生が奇しくも出された大人との関係ですね。先生の場合ちょっと問題がずれてしまって申し訳ないのですが、先生の場合は地域社会の問題でサラリーマンのことをちょっとおっしゃいましたけれども、主婦と自営業と小学校の子供、その人たちは助けられたり助けたりという関係が強いけれども、サラリーマンの場合は非常に少いというようなことをおっしゃいましたけれども、その辺のサラリーマンがそういう意識が少いということを言った場合に、勤労青少年だけ扱っていて出来るのかどうか。その辺のことがあるのではないかと思うのです。先生自身、もしか友情とか、あるいは勤労青少年を育てるという場合に、果して地域社会のそういうサラリーマン族というのですか、私もサラリーマンですけれども、そういう人間に対して何か現在ご活動されているか、あるいは何かそういうふうにしたいというような計画なりご意見なりがあればお教え願えたらと思います。

熊倉（講師）　さきほど私申し上げましたのは、一般的かどうかわかりませんけれども、ある地域におきますそういった意識調査の中で地域における人と人との関り合いの中ではいま言ったそういうような考え方が強い。特に勤労青少年ホームを利用している青年というものはやはり圧倒的にサラリーマンの勤労青年が多いわけでございます。彼らの背景になるものについて、自分は人の世話にはなりたくないけれども、また人の世話もしたくないということがある地域だけの調査でなくして、それは普遍的なものでおるとするならば、そういうものを背景に生活しておるこのサラリーマンの勤労青年が、やはりホームのグループ活動の中でもっと緊張したそういう環境の中でグループ活動をするということが必要であるとしても、それは非常にむずかしいのではないだろうかというお話だと思うのですけれども、全く私はそのとおりだと思います。

それで、その緊張感ということについて、一体あなたは地域においてそういう経験があるのかという一つのご質問だと思うのでございますけれども、実は私はそういった友情との関り合いがあるかどうかわかりませんけれども、私が住んでおります地域におきまして、実は造成された団地なのでございますけれども、その中に計画道路というものが実は買った時に設定されておりまして、それが入ってからそういうことに気がついたわけです。そういう住宅の中にそういう通過道路というものが将来出来たならば、せっかくのいい生活環境が破壊されるというようなことから、昭和四十七年ですからちょうど九四年前ですけれども、いろいろ道路のことについてのいろいろな協議会を作って、私はチーフになってやっておるわけなのですけれども、たまたまそういった一つの私にとっては、あるいはその

地域の人にとっては極めて共通な生活防衛的なもの、そういったものが自分たちの問題として、大げさに言えば一つの危機感をもって迫って来た場合に、それに対していろいろみんなで知恵を出し合って話し合う、そういう形の中で常日頃会社の勤めとか、勤めの行きとか帰りに「おはようございます」というそういう挨拶だけでない、もっと何かお互いに言いたいことを言いながら、自分のエゴを出しながら、そこで一つのものを見い出して行く、こういう形で現在進んでおりますけれども、これが勤労青年の場合の友情と関り合いがあるかどうか、友情とはちょっと違う面かもわかりません。そこにはやはりもっと大人としてのお互いの打算があるかもわかりません。けれども何かやはりそういったいわゆる仲良しグループを越えた何かお互いがこうしなければいけないのだという、そういうものはホームの中におけるグループ活動の中に芽ばえて行くということが、やはり世間一般の人と人との関り合いが、もしも自分は人の世話にもなりたくないけれども、自分は人の世話もしたくないというのがいまの一般の考え方であるならば、やはりそれよりもさらにもう少しお互いが助け合うというようなことが私は必要ではないであろうかという考え方の上に立ってさきほど申し上げたわけでございます。

江橋（司会）　ありがとうございました。よろしいでしょうか。野原先生は何か。お願いいたします。

野原（講師）　さきほどからいろいろお話ししましたことは、本当にこのような経験のある立派な方の前に本当に未熟な者が申し訳ないという気持を持ってお話をしておりましたけれども、ただ一つ私自身いまの若い人同志のつき合いの距離というのが、それがいい意味で出て来たということも言ったのですが、割合に薄い、浅い付き合いというか、早く距離を持って、よくあの人たちは「ギュッとならない関係」と言うのですけれども、本当の友だちなんていうのはあまりギュッとならないだろうというのです。やはりその意味である時期ものすごく争って友だち同志喧嘩をしたり、議論したり、大変争ってその後に出来た距離感というか、そういうお互いを自由でいるというか、そういうものになれば大変私は若い人はいい関係を持つたなという例も大くさんあるのですが、そういう意味で職場で争ったり、グループで喧嘩をしたり、女の子なんかよくやりますね、そういうものがいい意味のものかということを指導者が判断をして、もちろん仕事に影響があれば困るわけですが、それはある友人関係を作る、人間関係というのはこうなのだという、人間とは何たるかみたいなところがわかるような、そういうプロセスであるならば、少しやらせて欲しいなんてことを言うと企業の方に叱られるかも知れませんが、そういった意味で、これはどういう意味の争いかとか、そういうこともよく見ていただきたいと思います。それからいまの若い人は、暇がないという話しなのです。学校時代も塾へ行った、やれ暇がない。職場へはいっても結構暇がない。そういう中でゆっくり出来ないということもありますが、ともかく友人関係、本当にじっくりと喧嘩もさせるし、その揚句に自慢できるような、これはもう長い付き合いで本当にどんなことがあっても続くものだよという付き合いの方がだんだんふえて来ているということも申し上げて、私自身もそういう本当の友人関係というものを非常に欲しいと思います。いまでも四〇才、私近辺の課長さんなどが急に仕事が変ったとかでお苦しみになり「いまどんなことを自分が言っても聞いてくれる友だちがいたらな。」とかおっしゃいますが、そんな方がよく職場にいらっしゃいますね。忙しいのでつい友だちとだんだん縁遠くなった。「それに比べるといま若い人は友だちがいていいな。」なんて言う人もいるのですけれども、そんな意味で少し楽観的と言うか、若い人たちが友だち

を持とうとしているということの立場で話をずっとして来たわけなのです。失礼いたしました。

江橋（司会）　どうもありがとうございました。では他に何かご質問ございますでしょうか。

篠田（岐阜県関市勤労青少年ホーム館長）　諸先生方にどなたでも結構ですが、結論的な質問になるかもしれませんが、お願いいたしたいと思います。四人の諸先生方の細かい分析されたきょうのシンポジウムテーマの、特に友情という線でいまのお話を頂戴したわけでありますけれども、さきほど野原先生の「最近においては一つのお手本のない時代だ。」という言葉が出て来たわけなのですが、ここら辺で非常に広い意味から考えて、われわれ館長としましてここにお集りの館長の先生方につきましても五〇という歳を越えた方がかなり見えるわけですが、抽象的な細かい分析ということも必要ですけれども、何か一つお手本を出す時期には来ておるではないかと、こういうことを私は思うわけなのであります。戦後三〇年たちまして、まだまだ抽象的なことは取り上げられるけれども、いまの若者に対する何かの具体的指示なりをして、館長としてうちのホームに来る若者だけはなんとかして社会から誉めてもらうような若者を育てたいという気持というものはあるわけですけれども、ここら辺で何かお手本か何かを作るということですね。それにはいまの若者に何を求めるか。特に矢野先生は会社でも労務担当をしておみえになるわけですが、もしうちの会社に採用する人物であればどういう人物を採用するかと、こういう一つの基本から考えれば、これからの社会を背負って行く若者はこういう人でなければならないという、そこら辺のお手本をいま出す時期であるか、まだまだそこまで行かないのか、もうこれからの若者が背負って立つ日本というものに対する一つのお手本を作って行かなければならないのではないかというようなことを、私は考えるわけであります。いろいろ世界各国から日本に対するいろいろな批判、つまりマナーが悪いとか、モラルがないとかというようなこともよく言われるわけでありますが、われわれ館長として三三五五ホームにはいって来る若者に指導する時に、反論ばかり聞いておって指導の出来ない弱い五〇年代の私たちにとって、何かそこに指導するものがあって然るべきだと思います。説得しても説得される若者と、反発して不満で業をにやして帰って行く若者と二つに分けられるわけでありますが、こういうものに対する私は何か一つ与えたいということを考えるわけであります。こんな意味で一つ諸先生方どなたでもいいからこうあるべきだというような線が出るものかどうか、ご質問するわけです。以上です。

江橋（司会）　はいどうも。これは私が勝手に言ってはいけないのですが、大変むずかしい問題ではないかと思います。けれども、ちょうど最後のご質問として大変ふさわしいご質問ではないかと思いますので、本来ならば司会がなんとかまとめなければいけないのではないかと思いますけれども、それをしないためにもちょうど時間もだんだんよろしいようでございますので、四人の先生からお一人ずついまのご質問に対してひとつお答えいただけたら幸いに存ずる次第でございますので、また発言の順序に従いまして岡本先生からお願いいたします。

岡本（講師）　大変むずかしいご質問でございますけれども、私自身の考えでは、画一的なお手本というものは出せないというふうに思います。しかしそれでは指導しなくてもいいのかというと、必ずしもそうはならない。ではどんなふうな指導をすればいいのかということになりますと、はなはだ抽象的なお答えしか出来ませんけれどもそれぞれ館長さんなら館長さん、あるいは職場での関係者の方々、それぞれ自分が経て来て作り上げた価値観とか人生観とか、そういったものをあまり

抵抗を恐れずに出していいのではないか。それを押しつけろというわけではもちろんない。実際に押しつけることも不可能だと思います。しかしだからと言ってよそにお手本を求めて何かそれを取り次いでと言いますか、取り次いで青少年たちに与えるという形では結局うまく伝わらないと思うわけです。したがいまして反発はあるかもしれませんけれども、自分なりの体験から作り上げたものを打ち出す。それに対する抵抗があって、それに対してまたこちら側で反応するというようなことを通じてしか、結局指導というものは出来ないのではないかというふうに私自身は考えています。そう考えると非常にしんどくて、大変ですけれども、他に適当な方法というのも恐らくないのではないかと考えております。

江橋（司会） どうもありがとうございました。では矢野先生お願いいたします。

矢野（講師） 私自身は、彼らに何かの指針を与えるということは出来ないと思うのです。私が一番しなくてはいけないと思うことは一緒に考えることだと思っています。とは言いながら彼らに望むとすれば、私自身もこうありたいと思うとすれば、他でもよく言われていることではあるのですが、やっぱり自分の頭で考えて、自分の足で動いて、やっぱり自分の心に感じて仲間と一緒に住むという、一言で言えば主体性があって、しかも現実的に一歩一歩計画を立てて進んで行って、いわゆる連帯感を持ってやって行くという、そういうような人間像を描いてみたい気がするのです。そのためにはどうするのか、私はやはり職場の中にいる人間なのです。やはり私は富士フィルムの研究所にいるわけで、研究自身がなんかの成果を上げなければいけないわけで、新しい商品開発という成果を上げなければいけない、その方向になんといっても向って行くことが社会的な使命でもあると思いますし、それにどう向って行くか。それだけでなくて、そういう仕事に携わる一人一人、青少年一人一人がやはりそこで働いていることを誇りに思う、商品を誇りに思う職場を作って行くということは非常に大事になって来ると思う。

さらにやっぱりこの私どものいる研究所から人が育っているのだという、そういう環境条件を作ることだろうと思うのです。それを進めて行くに当って若い人たちがいまのような目標に向って一緒に考えて、一緒にやって行くというようにして行きたいと思うのです。一緒に考えるということは、あえて言いたいことは、一方で場合によっては過保護になってもいいし、あるいは放っぽり出してもいいし、彼らの力を一方で信じながら、しかし自分でやらなければいけないことはバリバリやってみる。あんまりあれこれ考えないで裸で私自身はぶっかって行く。それが一番彼らとわれわれの絆を作って行く、彼らは彼ら同志の間に絆を作って行くための、一番大事な姿勢なのではないかと、担当するスタッフとしてはそう考えている次第です。

江橋（司会） どうもありがとうございました。では野原先生お願いします。

野原（講師） いま矢野先生がおっしゃったことと殆んど同じでございますが、やはり若い人として目指すのは一人立ちということだと思います。ですからいろいろな意味で指導者の方は生活の知恵とか、生活して行く上のいろいろなことはどんどん教えていただきたいと思います。一人立ちして一人で歩けるようにして行くには一体自分は何をしたらよいかということを、それが最善の方法は一体何なのかということを、いつもある人と向き合った時に考えるわけなのです。そしてさらにさきほど私はお手本がないから自分で決めなくてはならない。本当に自分で決めたという意識が薄いためにすさまじい離転職もみられるのではないかと思うのです。自分で決めるということが非常に大事だということが世の中でわかって来て、この頃新聞に出ている投書、身の上相談なども全部そういう回答

の仕方に変りましたですね。前は「こうしなさい」と言ったのに、最近はいろいろアドバイスをした結果、最後は「どうぞあなたがお決めなさい。あなたの人生はあなたがお決めなさい」、そのとおりなのですけれども、これは紙の上だからのことで人間と人間とが関って指導をする時には、生きた指導ですから、生きた人間関係があるのですから、私たちは自分で決めるという大変なことについて、そばでどんな援助をしたらいいか。一緒にいてあげてもいいし、矢野先生がおっしゃったようなそういうことでもいいし、それをいくらかは自分で決めるとこれは大変で、どんなことでも賭ですから、本当に彼らは「困った、なんとか言ってくれ、こうしなさいと言って欲しい。」なんて言って来ますね、相談では。むしろ言わないと「なんだおもしろくない」というような、それを聞きに来たのだという人もいるわけです、非常に困ると。どっちに決めようか、決めてくれということもありますが、そこを一緒にやる、決めることを一緒に何か援助するということで私どもは少しだけ、ある部分を担当しているということでございます。

江橋（司会） どうもありがとうございました。では熊倉先生お願いいたします。

熊倉（講師） 前にちょっとテレビで岡本太郎さんがおっしゃっていたことなのですけれども、「大人と若い者の間に断絶がある。意見の相違がある。しかしよく考えてみるといまの大人が言っていることは、自分たちが汗水たらしたことではなくして、その前の前の前の代の人が作り上げたことを借りて来て、それでこれが大人のものだというふうに言っている。若い者は若い者で、自分たちが汗水たらしたものではなくて、よそから持って来たものをそれをさも自分たちが作ったような顔で言っている。そんなものをぶっけ合ったって、そこから新しいものは何も出て来ないのだ。」というようなことを言われておりましたけれども、私もやはりホームの中で、もし一つの手本があるとするならば、これはわれわれ館長と、それから利用する青年とは基礎体験が違うのですから、自ずから価値観とか、そういったものは私は違うのが当然だと思います。それはやはり私は私たちなりにその自分が得た体験、それをやはりぶっけることが必要ではないかと思います。青年のほうからもそういったものを出させて、そこでいろいろ喧嘩があるかもわかりませんけれども、もしそういう中で私はホームとしての非常に狭い所ですが、そういう中でお手本が出来るとするならば、そのお手本はやはり私はホームの職員と、それから青年との共同作品であるのではなかろうかというふうに考えております。

江橋（司会） どうもありがとうございました。おかげさまで司会者といたしましては大変いま心がやすまりつつあるわけでございますけれども、最後に大変結構な質問をしていただきまして、また先生方から大変結構な解答をしていただきまして、私何も言う必要は全然ないのではないかと思うわけでございます。今回のこういうシンポジウムのテーマがとりあげられたというのも、確かに人の心の問題でございますから、具体的に掴みにくいという問題がございますけれども、やはり大ざっぱに言ってしまえば、今日の世の中というものがやっぱり真の友情、あるいは真の友だとというものを得にくくなっている時代になりつつあるのではないか。しかしながら、われわれ人間の生活にとってやはり古来から友情ということが話題になっておりますように、やはりわれわれの人間の生活の中で第三者同志の間の心と心の繋りを持ち得るならば、やはりこれほど豊かな人生はないのではないかという一つの基本的な考え方があって、今回のテーマが設定されたのではないかと思うわけでございます。きょうの諸先生方のお話から、みなさまお一人お一人がある一つの考え方というものをお持ちになったのではない

かと思いますし、またどうかこれから日々今日の若者との交流の過程において一体真の友情とは何か、あるいはわれわれの人生において真の友を持つということがどういうことなのか、そういうことをひとつお互いに日々の生活の中で獲得をして行っていただけたら大変幸いに存ずる次第でございます。

大変司会がまずくてみなさん方は本当にここへいままでお座りになるのは大変な苦痛だったことと思いますけれども、時間になりましたのでこのシンポジウムはこれで終りにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）